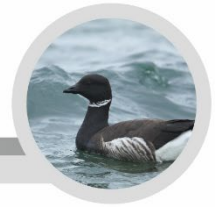


6.2 鳥類



(1) 県内の鳥類の概要

富山県は、富山湾から立山連峰まで標高差 3,000m に及ぶ起伏に富んだ地形をしている上に、植生自然度が全国屈指という豊かな自然に恵まれている。そのため、コンパクトな県でありながら、多くの種類の鳥類が記録されている。

富山県の鳥類については、清水・高畑（2023）が「富山県の鳥類目録」で、356 種（外来種 5 種除く）としている。これは、1989 年以降に発行された県内の鳥類に関する文献を網羅的にまとめたものである。その後、清水・高畑（2024）が「湯浅純孝鳥類・哺乳類コレクション」において、ハイイロヒレアシシギ、コムシクイ、カラアカハラ、シマゴマ、シロハラホオジロ、コホオアカの 6 種を追加した。さらに、富山県自然博物館ねいの里「研究報告」（2024）によりクロハゲワシ、日本野鳥の会富山「愛鳥」（2024）によりレンカク、ベニアジサシを追加した。一方、日本鳥学会による「日本鳥類目録改訂第 8 版」（2024）の記載に基づいて、リストに追加した種（ハチジョウツグミ、シベリアアオジ）と除外した種（ニシイワツバメ、コベニヒワ）があり、2024 年 12 月現在、365 種となっている。

県内での鳥類の構成は、留鳥（20%）、夏鳥（14%）、冬鳥（29%）、旅鳥（29%）、迷鳥（8%）である。冬鳥の構成比率が高いのは、越冬のために大陸から飛来する種が多いからである。また、旅鳥の比率が高いのは、本県が渡り鳥の日本海ルート上にあるからだと考えられる。

(2) 選定評価の方法

今回、日本野鳥の会富山が県からの委託を受け、選出したメンバーでワーキンググループを結成して、調査・選定・評価を実施した。

【作業手順】

- ①：「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」（2012）で選定された種 76 種を基に、富山県で記録がある種の中からワーキンググループからの提案を加え、調査対象種案を作成した。
- ②：2012 年 1 月からの文献調査およびワーキングメンバーの保有データより抽出作業を実施し、2024 年 8 月までの記録をデータベース化した。
- ③：②と並行して対象種の現地調査を行った。ただし、現地調査は、すべての種において詳細に行うことは時間的に困難であったため、市町村ごとに可能な範囲で行った。
- ④：②と③の調査結果を整理し、種ごとの記録件数やメッシュの占有度などを把握した。
- ⑤：客観性を図るため、カテゴリーの選定基準を作成し、内容を検討した。
- ⑥：④と⑤の結果を基に、改訂レッドリスト選定種とそのランクを決定した。

なお、調査対象種は、前回（2012）からの 12 年間、県内で定期的に繁殖、越冬する種や、ある期間滞在する種を対象に検討した。本来の渡りのルートからはずれて偶発的に飛来してきた迷鳥や、5 回以内の記録しかない旅鳥は選定対象から原則除外した。また、食物連鎖の頂点に位置し個体数が少ない猛禽類や、環境の変化を受けやすい繁殖期にかかわる種を重視して評価した。

一方で今回新たに、「絶滅+野生絶滅」「絶滅危惧Ⅰ類」「絶滅危惧Ⅱ類」「準絶滅危惧」「情報不足」のそれぞれに選定基準を設けた。選定基準の作成にあたっては、猛禽類と猛禽類でない種、県内で繁殖している種と繁殖していない種（非繁殖）の 4 つのパターンに分けて考えることにした。選定にあたっては定量的評価を原則としたが、調査による生息状況についての把握が十分ではない種が多く、

定性的評価を並行して行った。

【選定基準】

○猛禽類

絶滅危惧Ⅰ類	繁殖	① 県内繁殖ペア数 10 未満 または、 ② 繁殖成功率やペア数の減少が著しいもの
	非繁殖	① 県内確認回数が過去 10 年で 20 回未満 ② 特に過去 10 年を 2 分した際、後半での記録が減少しているもの ③ 県内立ち寄り地、越冬地が限定的で、開発などにより容易に姿を消す可能性があるもの ①～③のいずれかが該当
絶滅危惧Ⅱ類	繁殖	① 県内繁殖ペア数 10 以上 100 未満であると推定される および、 ② 繁殖成功率やペア数の減少が見られるもの
	非繁殖	① 県内確認回数が過去 10 年で 50 回未満 ② 特に過去 10 年を 2 分した際、後半での記録が減少しているもの ③ 県内立ち寄り地 or 越冬地が限定的で、開発などにより容易に姿を消す可能性があるもの ①or②+③が該当
準絶滅危惧	繁殖	① 県内繁殖ペア数 100 以上 200 未満であると推定される および、 ② 繁殖成功率やペア数の増加が見られないもの
	非繁殖	① 県内確認回数が過去 10 年で 100 回未満 ② 特に過去 10 年を 2 分した際、後半での記録が減少しているもの ③ 県内立ち寄り地 or 越冬地が限定的で、開発などにより容易に姿を消す可能性があるもの ①+②+③が該当
情報不足	繁殖	絶滅にいたる可能性があるが、情報が不足している
	非繁殖	絶滅にいたる可能性があるが、情報が不足している

○猛禽類でない種

絶滅危惧Ⅰ類	繁殖	① 県内繁殖ペア数 20 未満 ② 繁殖地が限定されるもの ③ 繁殖成功率やペア数の減少が著しいもの ①～③のいずれかが該当
	非繁殖	① 県内確認回数が過去 10 年で 20 回未満 ② 特に過去 10 年を 2 分した際、後半での記録が減少しているもの ③ 県内立ち寄り地 or 越冬地が限定的で、開発などにより容易に姿を消す可能性があるもの ①～③のいずれかが該当
絶滅危惧Ⅱ類	繁殖	① 県内繁殖ペア数 20 以上 100 未満であると推定される および、 ② 繁殖成功率やペア数の減少が見られるもの
	非繁殖	① 県内確認回数が過去 10 年で 100 回未満 ② 特に過去 10 年を 2 分した際、後半での記録が減少しているもの ③ 県内立ち寄り地 or 越冬地が限定的で、開発などにより容易に姿を消す可能性があるもの ①or②+③が該当

準絶滅危惧	繁殖	① 県内繁殖ペア数 100 以上 500 未満であると推定される および、 ② 繁殖成功率やペア数の増加が見られないもの
	非繁殖	① 県内確認回数が過去 10 年で 200 回未満 ② 特に過去 10 年を 2 分した際、後半での記録が減少しているもの ③ 県内立ち寄り地 or 越冬地が限定的で、開発などにより容易に姿を消す可能性のあるもの ①+②+③が該当
情報不足	繁殖	絶滅にいたる可能性があるが、情報が不足している
	非繁殖	絶滅にいたる可能性があるが、情報が不足している

(3) 選定種の概要

今回の改訂版レッドリストの選定種数は 86 種であり、前回に比べて 10 種増加した。ランクアップした種は 25 種あり、そのうち「絶滅危惧Ⅱ類」から「絶滅危惧Ⅰ類」にアップした種が 1 種、「準絶滅危惧」から「絶滅危惧Ⅱ類」にアップした種が 5 種であった。また、カテゴリー外から「絶滅危惧Ⅱ類」に新たに選出された種が 3 種、「準絶滅危惧」に選出された種が 9 種、「情報不足」に選出された種が 7 種であった。

一方、今回ランクダウンした種は 15 種あり、「絶滅危惧Ⅰ類」から「絶滅危惧Ⅱ類」にダウンした種が 2 種、「絶滅危惧Ⅰ類」から「情報不足」にダウンした種が 1 種、「絶滅危惧Ⅱ類」から「情報不足」にダウンした種が 2 種、「準絶滅危惧」から「情報不足」にダウンした種が 1 種、「準絶滅危惧」からカテゴリー外になった種が 6 種、「情報不足」からカテゴリー外となった種が 3 種あった。ダウンした理由は、確認できた個体数が増えた種や生息状況が明らかになってきた種、今回新たに設定した選定基準との整合性を図った種などがあった。また、国の選定種であっても、本県の生息状況を優先にしたためにダウンした種があった。その中で、今回カテゴリーから外れた種が合計 9 種ある。生息数は多くはないものの県内での生息地や個体数が安定しており絶滅の恐れはないと判断した種や、県内の滞在期間が短い旅鳥などである。

「絶滅危惧Ⅰ類」は 16 種であり、2 種減少した。コクガンは近年渡来数が激減しており、前回よりランクが上がった。一方、クマタカ、サシバは、個体数が今回設定した基準と照らし合わせたことによりランクが一つダウンした。クロツラヘラサギは、この 12 年間の渡来数が少ないため、「情報不足」とした。

「絶滅危惧Ⅱ類」は 21 種であり、前回より 7 種増加した。ササゴイ、ツミ、ハイタカ、オオコノハズク、ノジコのランクが上がった。新規として、コノハズク、トラフズク、コミミズクのフクロウ類が選定された。

「準絶滅危惧種」は 25 種で、前回より 3 種減少した。一方で、クロガモ、ジュウイチ、カッコウ、バン、ヤマシギ、アオシギ、ハイイロチュウヒ、フクロウ、コヨシキリが新たに選定された。

「情報不足」は 8 種増えて 23 種となった。オシドリやオオアカゲラのように繁殖密度が低い種が新たに選定された。シギ科やチドリ科については、本県では干潟の環境がなく、砂浜が衰退しつつあることに加え、水田環境が変化している現在、多くの種の渡来数が減少している。そこで、国のレッドデータブック掲載種を考慮し、「情報不足」として選定して今後の渡来状況を注視することにした。

(4) 絶滅の危機に追い込んでいる要因（減少要因）

選定した鳥類の生存を追い込んでいる要因は様々にある。特に食物連鎖の頂点に位置する猛禽類は、もともと個体数が少ないことに加え、土地改変を含む開発事業による営巣環境の消失や採餌環境および、餌資源の減少によって生息数が減少している種が多い。山岳・森林地帯におけるイヌワシ、クマタカ、ハチクマ、里山地帯におけるオオタカ、サシバ、河川や海岸におけるハヤブサ、ミサゴ、チュウヒなどの減少が危惧される。里山地帯におけるサシバにおいては、水田や耕作地の放棄など、農業の撤退と並行して採餌場が減少した例もある。

猛禽類の生息が維持されている地域は、環境が多様で、生態系が豊かであることを示す証になっている。その点で、猛禽類だけでなく、山地に生息するブッポウソウやヨタカ、ノジコ、アカショウビンなども営巣環境の消失によって減少している。

また、河川改修による河原の整備やヨシが繁茂する湿地の開発等によって、サンカノゴイやヨシゴイ、ササゴイ、シギ科やチドリ科の生息環境が奪われている。また、水田の乾田化や用水整備に加え、耕作放棄もあって、ヒクイナやタマシギなどの種が急速に姿を消しつつある。

一方、行楽目的や野鳥撮影目的のカメラマンなど、繁殖中の営巣地への過度な人の接近が要因となって繁殖妨害につながっている例がある。特に警戒心の強い猛禽類をはじめ、カメラマンに人気のあるアカショウビンやサンコウチョウなどは、十分な配慮が必要である。また、レジャーを目的とする河原や河口付近、砂浜への立ち入りによって、コアジサシやシギ科やチドリ科の生息や繁殖を脅かしている。

コハクチョウやオオバン、ダイサギのように、近年生息数が急速に増えている種があり、生態系のバランスが崩れていくことも危惧される。この他にも、地球の温暖化や気候変動などが生態系に影響を及ぼしていることが考えられるので、今後、注視していく必要がある。

(5) 種のリストの整理基準

種名や学名、順番などはすべて日本鳥学会による「日本鳥類目録改訂第8版」（2024）の記載に基づいて表現、整理した。

(6) 謝辞・協力者

今回の改訂にあたり、次の方々から貴重な情報の提供をしていただきました。心よりお礼申し上げます。（五十音順、敬称略）

伊林早苗、日 昭夫、薬師正人、山田一昭

（文責：高畑 晃）

トキ (ペリカン目・トキ科)
Nipponia nippon

富山県 2025 カテゴリー：絶滅＋野生絶滅
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IA 類

選定理由

県内での野生個体の確認記録は 1950 年代に途絶えている。2009 年以降新潟県佐渡市で放鳥している人工繁殖個体が時折県内で確認されている。

形態

全長約 77cm。全身が白っぽい水鳥で翼や尾はトキ色。嘴は長く湾曲し、頭部前半は赤い皮膚が裸出する。後頭部に長い冠羽をもつ。繁殖期には頭から背にかけ灰黒色となる。

国内の分布状況

明治時代以前は北海道から九州にかけて広く分布していたとされるが、明治時代以降、乱獲や農薬による餌動物の減少、生息環境の減少により個体数が減少した。1981 年に新潟県佐渡市の野生個体が人工増殖のため全て捕獲され国内の野生個体は絶滅した。

県内の分布状況

1800 年代中頃までは県内各地に生息していたと考えられる。しかし、明治時代以降、捕獲や生息環境悪化に伴い急激に減少し県内から姿を消した。1950 年代に富山市水橋地内で地元住民に目撃された個体が最後の野生個体の記録である。

2009 年以降、新潟県で放鳥された個体が時折飛来している。

生態・生息環境

湿地や水田近くの山地の高木の樹上に営巣する。1 腹卵数 2～3 卵、抱卵日数 28～30 日。採餌物はミミズ・カエル・小魚・タニシ・昆虫など。

生存への脅威（減少の要因）

水田、湿地などの餌環境の消失。農薬の過剰使用による餌動物の減少。サギ類駆除の誤射。

保全対策

餌場環境の維持。農薬の過剰使用の防除。有害鳥獣駆除員への教育の徹底。

特記事項

国際保護鳥、国内希少野生動植物種、特別天然記念物。

(文責：中田 達哉)



コクガン (カモ目・カモ科)
Branta bernicla

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

冬鳥として飛来するが、個体数は少ない。

形態

全長約 60cm。頭部や背面・尾・足は黒く、喉・上尾筒・下尾筒は白い。脇には白色と淡黒褐色の縞模様がある。

国内の分布状況

冬鳥として主に本州中部以北に飛来するが、北方ほど多い。

県内の分布状況

氷見市や魚津市など富山湾沿岸にほぼ毎年のように渡来していたが、近年は見られない年もある。渡来数は数個体と少ない。

生態・生息環境

海上や港湾を生息域にしているガンで、日中は海上などで休み、主に朝夕や夜間に岸に採餌にくる。特に岩礁や船着場に付着するアオサやイワノリなどの海藻を食べる。家族群で見られる。

生存への脅威（減少の要因）

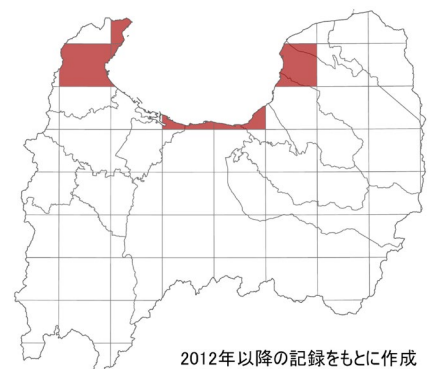
釣りなどマリンスポーツが生息環境に影響を及ぼすと考えられる。

保全対策

生息環境の静謐(せいひつ)のための対策。

特記事項

国指定天然記念物。



(文責：高橋 輝男)

選定理由

日本列島の地史と生物相の変遷を語る代表的な生物であること。限定された山岳地域を生息域とする本種は、気候温暖化による生息環境の変化、国立公園などの利用者からの圧力による生息環境の悪化により絶滅が危惧されるため。

形態

全長約 37cm。保護色で知られ季節により換羽する。背面は、夏羽のオスは黒褐色、メスは黄褐色、秋羽は茶褐色、冬羽は尾を除き白色。この間、換羽が連続進行するので斑状の中間羽がある。オスには繁殖期に眼上に赤い肉冠、冬羽には黒い過眼線が現れる。雌雄とも距趾(きょし)はない。

国内の分布状況

氷期の遺存種として本州中部山岳地帯の北アルプス・南アルプス・妙高山塊などに分布する。中央アルプス・八ヶ岳・蓼科山・白山などでは、遅くとも 1960 年代にいったん消滅した。白山では 2009 年に再発見され、2016 年を最後に確認されていないが、DNA 分析により、立山や爺ヶ岳など北アルプス中部の集団に由来するものと推定されており、富山県内の個体群をソースとした分散や、他個体群との遺伝的交流の可能性が残っていることが示唆された。1980 年代には約 3,000 羽と推定されたが、2000 年代には 2,000 羽弱に減少したと推定されている。

県内の分布状況

北アルプスの朝日岳周辺から県境の三俣蓮華岳までの高山帯並びに亜高山帯に分布する。立山一帯(1,070ha)での定期調査では、267 個体(1972 年)、244 個体(1981 年)、213 個体(1986 年)、333 個体(1991 年)、334 個体(1996 年) 167 個体(2001 年)、225 個体(2003 年)、245 個体(2006 年)、284 個体(2011 年)、295 個体(2016 年)、324 個体(2021 年)と推定され、国内では比較的安定した貴重な生息地と言えよう。

生態・生息環境

高山帯で繁殖し、冬期は亜高山帯に漂行する。ペアで生活し、ハイマツ林縁などに営巣する。7 月に孵化し、雛はメスと共に高山草原を移動しながら成長する。繁殖に失敗した場合、当年の再営巣はない。夏の後半から冬は群れ生活。食植性で高山植物の葉や茎、漿果(しょうか)などを採餌するが、小昆虫もついばむ。産卵期 6~7 月、1 腹卵数 3~9 卵、抱卵日数約 22 日。

生存への脅威(減少の要因)

観光客や登山者による行動攪乱や天敵誘引、高山帯の環境汚染にともなう疾病の蔓延、汚染物質の体内蓄積、工作物新設による行動域の物理的制約・狭小化など生存への課題がある。また、気候変動による生息域の縮減や、ニホンザル、ニホンジカなどの鳥獣が高山帯に侵入することによるリスクも懸念されている。

保全対策

生息環境の厳正な保全が必要で、国立公園の利用にも十分な配慮が求められる。生息地に立ち入る観光客、登山者、山小屋従事者などすべての人々は、ライチョウの生態を理解し、ルールやマナーの遵守徹底が求められる。また、入山が難しい山域でも、モニタリングなどの現状把握が必要である。現在では保護増殖事業が展開され、例えば中央アルプスでは、人工飼育・繁殖個体を利用した野生復帰事業が行われている。

特記事項

国内希少野生動植物種、特別天然記念物、富山県鳥。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 満彦)

ヒクイナ (ツル目・クイナ科)

Zapornia fusca

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

湿地の埋立て、ヨシ原の開発、圃場整備などにより生息環境が減少し、生息数が極めて少ない。

形態

全長約 22cm。体の上面は暗緑褐色で、頭部から腹部にかけては赤褐色。下腹部から下尾筒は白と黒褐色の横縞模様がある。嘴は黒色で、虹彩は赤色。足は長く、全体が赤色。

国内の分布状況

夏鳥として北海道から九州の日本各地に渡来する。本州中部以南では越冬する個体もいる。

県内の分布状況

2012 年以降、本種の生息が確認されているのは富山市内の 1 か所のみ。その場所では繁殖が確認される年もあるが、県内での個体数および生息場所は極めて少ない。

生態・生息環境

平地の河川、池沼、ヨシ原、水田脇の草むらなどに生息する。半夜行性で早朝や雨天には日中にも活動するが、警戒心が強く、物音や上空を飛ぶものがあるとすぐに草の中に隠れる。夜間や早朝に「キョツ、キョツ、キョツ、キョツキョツ…」と続けて鳴き、段々とテンポが速くなる。ヨシやイネなどの間に営巣する。雛は早成性で、孵化して間もなく歩き出す。採餌物は小昆虫や甲殻類、小魚のほか草の種子も食べる。産卵期 5～8 月、1 腹卵数 5～9 卵、抱卵日数約 20 日。

生存への脅威（減少の要因）

河川周辺の整備工事や圃場整備などで生息環境が減少している。本種の生息地である富山市のヨシ原は、2015 年ごろに行われた水田化工事と圃場整備により面積が半減した。除草や病虫害駆除のための強力な農薬使用も本種の生息環境を悪化させていると考えられる。

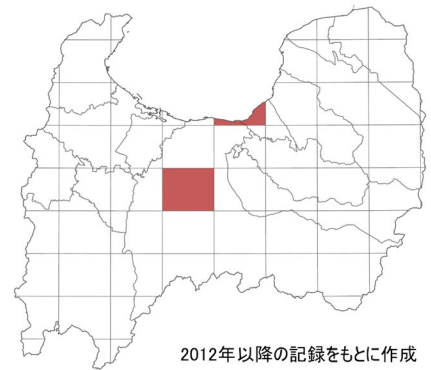
保全対策

生息や繁殖に適したヨシ原や草むらなどの水辺環境の保全。

(文責：木村 知晴)



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

タマシギ (チドリ目・タマシギ科)

Rostratula benghalensis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

圃場整備などにより生息環境が減少し、生息個体数が減少している。

形態

全長約 24cm。オスは顔から胸が灰褐色で、眼の周囲の勾玉模様は淡褐色。背面は茶褐色。メスは顔から上胸が赤褐色で、下胸は黒く、胸側には太く白い縦帯がある。眼の周囲の勾玉模様は白色。体の背面は黒褐色。雌雄とも淡褐色の頭中央線があり、腹から下尾筒は白色。風切り羽には黄褐色の丸い斑紋が多数並ぶ。

国内の分布状況

本州中部以南、四国、九州で繁殖する。冬季はより南に移動する個体もいる。

県内の分布状況

2012 年以降、県内では富山市と上市町で数例確認されているのみであり、生息個体数は極めて少ないと推測される。

生態・生息環境

河川や水田、休耕田などに生息する。主に夕方から早朝に活動し、繁殖期にはメスが夜間に「コォーツ、コォーツ、コォーツ、・・・」と 10 回以上続けて鳴く。繁殖は一妻多夫で、産卵後はオスが抱卵・育雛をし、メスは別のオスを求める。採餌物は植物の種子や小昆虫、貝、ミミズなど。冬期には県内にも観察例があるが、多くは温暖な地に漂行する。1 腹卵数 3～6 卵、抱卵日数 19～20 日。

生存への脅威（減少の要因）

湿地の埋立てや水田の乾田化、圃場整備や用水路の三面コンクリート化などにより、生息環境が減少している。

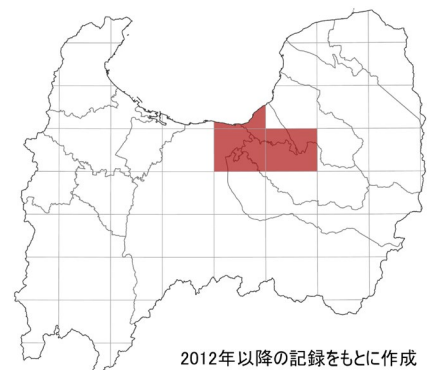
保全対策

湿地や草むらの保全、農業従事者の理解と協力が必要である。

(文責：木村 知晴)



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

コアシサシ (チドリ目・カモメ科)

Sternula albifrons

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

繁殖地が限定されている。

形態

全長約 25cm。翼開長 47～55cm。夏羽では頭部、過眼線が黒く、背面は青灰色。尾と下面は白色。嘴は黄色で先が細長い。足はオレンジ色で短く、水かきがある。冬羽は額の白色が広くなり、嘴は黒く足も暗化する。

国内の分布状況

本州以南に夏鳥として渡来し、局地的に集団で繁殖コロニーを作る。

県内の分布状況

渡りの時期には県内各地の海辺や河川、水田などで見られる。かつて、1950年代から 1960 年代までは常願寺川や神通川、庄川などの砂礫のある河川や、富山新港後背地の埋立地で大小の繁殖コロニーがあった。その後、繁殖地は減少し、2010 年代は、小矢部川、神通川、常願寺川、片貝川、黒部川などのうち 1～3 か所の中洲が繁殖地となった。2021 年以降は、主に黒部川河口の中洲で繁殖している。

生態・生息環境

夏鳥として水辺に渡来し、低空飛行をして頭から水中に飛び込み小魚を採餌する。河川の中洲や埋め立て地などの裸地に集団で営巣する。地上に浅いくぼみを作り卵を産む。孵化後 2～3 日は巢中で育てられ、離巢して 20 日くらいで飛行する。コロニー内に天敵が近づくと一斉に飛び立ち共同防御をする。卵や雛の外見は砂礫に似た保護色となっている。産卵期 5～7 月、1 腹卵数 2～3 卵、抱卵日数 19～21 日。

生存への脅威(減少の要因)

富山県内で繁殖地として多く利用されるのは河川の中洲である。河川の草地化、釣り人や四輪駆動車、オフロードバイクの乗り入れなどで繁殖に支障がでる。カラス、チョウゲンボウ、ハヤブサなどによる食害もある。近年、頻繁に発生する夏期の豪雨で繁殖地の中洲が水没することがある。黒部川の場合、ダムの連携排砂による影響も懸念される。

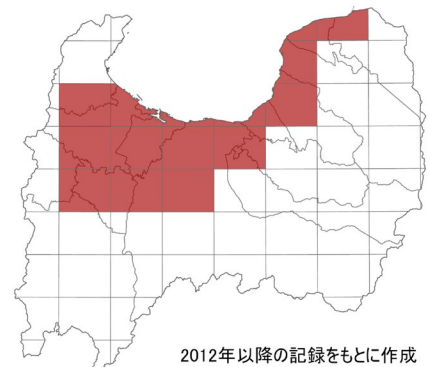
保全対策

安息な繁殖環境(植生の遷移進行のない洪水の氾濫原のような不安定な環境)の保全。

(文責: 和田 浩一)



撮影: 高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

サンカノゴイ (ペリカン目・サギ科)

Botaurus stellaris

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧ⅡB 類

選定理由

数少ない冬鳥として、県内で確認されているが、近年渡来記録が減少している。

形態

全長約 70cm。全身黄褐色と暗褐色のまだら模様。首には黒い縦斑がある。嘴と足は淡緑色、虹彩は黄色または橙黄色。

国内の分布状況

北海道と本州中部以北には夏鳥または留鳥として、本州中部以南では冬鳥として分布する。国内の繁殖地は局地的で、非繁殖期の記録は日本各地にあるものの稀であることから、個体数は多くないと推定されている。

県内の分布状況

冬鳥として、河川、湖沼などの水域に形成された広い抽水植物群落、海浜に近い抽水植物の多い湿地に渡来する。もともと個体数の少ない種ではあるが、近年は渡来記録自体が減少している。

生態・生息環境

大規模なヨシ原に生息する。本種の体色は枯れたヨシ原では隠蔽色となる。主に夜行性とされており、魚類や両生・爬虫類、甲殻類を採餌する。産卵期 6～7 月、1 腹卵数 5～6 卵、抱卵日数 25～26 日、巢内育雛 15～20 日。

生存への脅威(減少の要因)

河川や湖沼の護岸や拡張などの改修工事、湿地の埋め立てに伴う生息環境(抽水植物群落)の消失。工事や自然災害による水脈の分断に伴う湿地やヨシ原の乾燥化。

保全対策

河川や湖沼、湿地などの水域に形成される大規模なヨシやガマなど、抽水植物群落の維持管理。

(文責: 中田 達哉)



撮影: 高畑 晃 (新潟県にて)



2012年以降の記録なし

ヨシゴイ (ペリカン目・サギ科)
Ixobrychus sinensis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

生息地のヨシ原の減少と個体数の減少。

形態

全長約 37cm。体色は黄褐色でオスの頭上は黒色、メスは赤褐色。飛ぶと風切羽の黒色が目立つ。虹彩と足は黄色。

国内の分布状況

夏鳥として北海道から九州に渡来するが、西南日本では越冬することがある。

県内の分布状況

河川、湖沼などの水域に形成された広い抽水植物群落、海浜に近い抽水植物の多い湿地に渡来する。1960 年代までは大型河川周辺のヨシ原でよく見られたが、近年の分布は局所的である。本種は抽水植物群落の中で繁殖するため、繁殖中は個体や巣を見つけることが難しい。そのため県内の確実な繁殖記録はほとんどない。

生態・生息環境

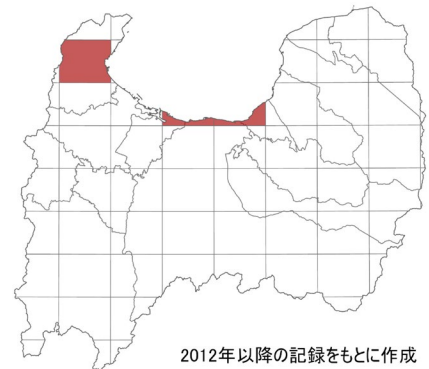
ヨシ原の水際を歩行しながら、小魚や両生類、昆虫などを採餌する。巣は主に水域内の抽水植物群落内のヨシやガマなどの葉上や茎の間につくる。産卵期 6～8 月、1 腹卵数 4～7 卵、抱卵日数 17～20 日、巣内育雛約 20 日。

生存への脅威（減少の要因）

河川や湖沼の護岸や拡張等の改修工事、湿地の埋め立てに伴う生息環境(抽水植物群落)の消失。工事や自然災害による水脈の分断に伴うヨシ原の乾燥化。

保全対策

河川や湖沼、湿地などの水域に形成される大規模なヨシやガマなど、抽水植物群落の維持管理。生息状況調査による確実な繁殖地の特定と保全。



(文責：中田 達哉)

ミゾゴイ (ペリカン目・サギ科)
Gorsachius goisagi

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

富山県内において本種が年間に確認される回数は 0～2 回と僅かであり、繁殖の記録もほとんどないため、県内の生息個体数は極めて少ないと考えられる。

形態

全長約 49cm。体の上面は赤褐色、下面は淡褐色で黒褐色の縦斑がある。風切は黒っぽく、各羽の先端は赤褐色。嘴はやや短く黒色。足は緑黒色で虹彩は黄色。

国内の分布状況

関東以南の本州・四国・九州・伊豆諸島に夏鳥として渡来し、繁殖する。主に台湾やフィリピンで越冬し、南西諸島や九州でも少数が越冬する。分布地における個体数は少ない。

県内の分布状況

2012 年以降は氷見市、高岡市、小矢部市、南砺市、砺波市、富山市、滑川市で記録がある。確認時期は 4～6 月が多いが、7～9 月にも確認されている。過去には富山市で繁殖した記録があるが、近年の繁殖状況は不明。

生態・生息環境

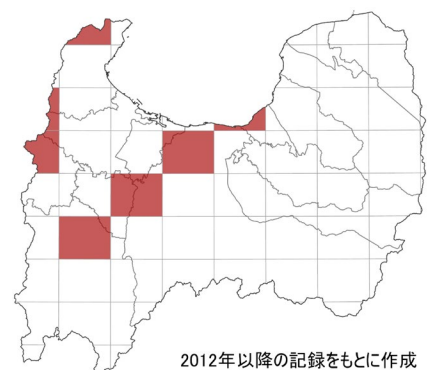
丘陵や低山の薄暗い森林に生息し、樹上に営巣する。群れをなさず単独またはペアでいる。主に夕方から夜間に活動し、沢や湖沼などでサワガニや両生類などを採餌する。渡りの時期には平地の公園などでも見られることがある。産卵期 4～6 月、1 腹卵数約 3 卵、抱卵日数 20～27 日、巣内育雛 34～37 日。

生存への脅威（減少の要因）

森林の開発による環境変化により、本種が生息できる環境が減少していると推測される。また、生息地の小川や沢が治水工事により改修されることで、餌となる生物が減少していることも、減少要因の一つとなっている。

保全対策

低山帯の森林環境と森林の中を流れる小河川の保全が必要である。



(文責：木村 知晴)

クロサギ (ペリカン目・サギ科)
Egretta sacra

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

繁殖可能な環境に限られ、個体数は多くはない。

形態

全長約 63cm。全身の羽毛が灰青色味を帯びた墨色。種子島以南には全身白色の個体もいる。嘴は黄褐色か黒っぽい色。後頭に房状の短い冠羽があり、頸と背に飾り羽がある。虹彩は黄色、足は他のシラサギ類に比べ短く、黄緑色。

国内の分布状況

日本海側では秋田県以南、太平洋側では千葉県以南に分布する。北海道でも記録されており、分布域は北方に拡大傾向にある。

県内の分布状況

氷見市から朝日町まで、富山湾に面する各市で記録がある。氷見市や高岡市の海岸では通年見られるが、県東部の海岸でも確認記録が増加している。

生態・生息環境

単独またはペアで行動し、海岸の岩礁、入り江、河口などで魚類や甲殻類などを採餌する。海岸の崖や岩の隙間に枝を運び営巣する。氷見市沖の虻ヶ島では樹上営巣や、人工構造物の中に営巣した例がある。また、近年は岸の近くの海上にある波消しブロック帯に枝を運ぶ個体も観察されており、その中で営巣していると推測される。1 腹卵数 2～3 卵、抱卵期間 25～28 日、巢内育雛約 20 日。

生存への脅威（減少の要因）

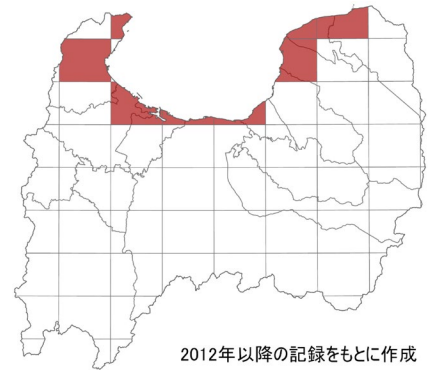
富山県内では繁殖に適した岩場が少ない。繁殖期に釣り人や観光客が、営巣地に近づき繁殖障害となっている。

保全対策

岩礁海岸の保全、繁殖地への釣り人などの立入り規制。



撮影：木村 知晴



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

イヌワシ (タカ目・タカ科)

Aquila chrysaetos

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧 I 類

環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧 IB 類

選定理由

森林生態系の頂点に位置し、極めて限られた生息数であること。餌資源の減少や採餌・生息環境の悪化から生息数は、激減している。

形態

全長 75~89cm。翼開長 170~213cm。オスよりメスの方が大きい。成鳥は、全身ほぼ暗褐色で後頸(こうけい)に金褐色の羽毛を持つ。幼鳥は、全身ほぼ黒色で翼と尾に明瞭な白斑があるが、加齢とともに白色部は減り、5~6年で成鳥羽となる。

国内の分布状況

以前は、北海道、本州、四国、九州に分布していたが、現在、四国・九州では消滅したと考えられる。最も生息数の多い東北から北陸にかけての地域でも近年、個体数減少が著しい。全国での生息数は 500 羽程度と推定されている。

県内の分布状況

以前は、県西部から東部の山地に広く見られたが、現在ペアでの生息は、東部中心に 5 ペアのみ。1990 年頃に 21 ペア以上確認されていたペア数は、現在の 5 ペアにまで激減。繁殖成功率も低く、県内絶滅が最も危惧される鳥類の 1 つである。

生態・生息環境

山地帯から高山帯に生息する。県内ペアの行動圏は 1 ペアあたり平均 168(120~245)km²と非常に大きい。食性はノウサギが最も多く、次いでヤマドリ・ヘビ類であったが、近年ヘビ類の割合が非常に高い。時には、カモシカやニホンジカの幼獣、トビやクマタカなども捕食することがある。産卵は 2 月頃、1 腹卵数は普通 2 卵、抱卵日数約 42 日、巣内育雛 70~90 日程で 6~7 月に巣立つ。

生存への脅威(減少の要因)

森林を使用しなくなった日本人の生活様式の変化は、イヌワシやその獲物が好む明るく開けた環境を激減させ、餌の確保を困難にしている。また、行動圏内における工事や開発などの行動域利用に制限を与える行為もイヌワシの生息を悪化させる。特に風力発電施設(風車)は、岩手県で衝突死の事例もあり直接的な脅威となる。また、カメラマンや観察者による個体や営巣地等への接近も大きな脅威となる。

保全対策

本種のこれ以上の減少を避けるためには、営巣地周辺への接近や工事だけでなく、ペアの行動圏内全体で生息に影響を及ぼす行為を排除することが必要である。一見影響軽微と考えられる行為であっても、ペアの生息や繁殖に大きな影響を与える恐れがあることから、影響回避・軽減を図るため、県内の生息状況を熟知している者と行政・事業者などが計画前の段階から相談できる体制の構築が非常に重要であり、急務である。また、餌資源や狩場適地の増加を目的に盛り込んだ森林の整備や利用も重要である。

生息地情報の取り扱いについては、細心の注意が求められる。

特記事項

国内希少野生動植物種、国指定天然記念物。



(文責: 小澤 俊樹)

チュウヒ (タカ目・タカ科)

Circus spilonotus

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧 IB 類

選定理由

ヨシ原に生息するタカで湿原生態系の頂点に位置し、繁殖地は限られている。県内における生息適地は減少している。

形態

全長約 48~58cm。翼開長 113~137cm。オスよりメスの方が大きい。翼と尾と足が長い。雌雄や年齢差で異色。オスは頭部が灰色で褐色や黒色の縦斑が粗密にあるものなど色彩変異が多い。メスは全身褐色。嘴は黒色、足は黄色。

国内の分布状況

日本には大陸から冬鳥として渡来するが、北海道や青森、秋田、石川、茨城、愛知、三重、福岡の各県の河川や湖沼、海岸の干拓地で繁殖が確認されている。

県内の分布状況

越冬および渡りの時期に、平地から丘陵帯にあるヨシ原に生息し、秋には標高 3,000m 近くでも確認される。射水市のヨシ原などでは少数が繁殖(2011 年: 1 ペア)していたが、現在繁殖は確認されていない。

生態・生息環境

埋立地や河川・湖沼周辺のヨシの生育する湿地に生息する。巣は地上にヨシの枯れ葉を積み、産座を作る。通常、繁殖はオス 1・メス 1 のペアで行われるが、国内で一夫多妻での繁殖も確認されている。低空をゆっくりとした羽ばたきと滑空を繰り返して飛び、ネズミ類や小型鳥類、カエルなどを採餌する。産卵期 4~5 月、1 腹卵数 3~7 卵、抱卵日数 35 日前後、巣内育雛約 35 日。

生存への脅威(減少の要因)

繁殖地である埋立地のヨシ原は、刈り取られたり、工場が誘致されたりするなどして繁殖適地が大きく減少している。

保全対策

営巣場所や採餌場所として必要な広々としたヨシ原の保全と、繁殖期の立入りなどの規制が必要である。

特記事項

国内希少野生動植物種。



撮影: 高畑 晃



保護上の観点から分布位置は非公開

(文責: 小澤 俊樹)

ブッポウソウ (ブッポウソウ目・ブッポウソウ科)

Eurystomus orientalis

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧 IB 類

選定理由

山地帯のブナ林などに生息するが、近年全国的に著しく減少しており、本県において絶滅する可能性が高いため。

形態

全長約 30cm。頭部は暗色、体は青緑色で翼に白斑があり、飛翔時によく目立つ。嘴と足は赤色。嘴は大きく、先が釣状に曲がる。足は短く足指の第 3 趾と第 4 趾は癒合している。

国内の分布状況

夏鳥として本州以南に渡来する。本州中部より南西部に多いが、分布は局地的。近年、個体数の減少が著しい。越冬地にも問題があることも推測されるが詳細不明。

県内の分布状況

県内の低山から山地の森林で記録されているが、観察例は多くはない。山間地の集落に隣接する林にも生息するが、河川や谷筋などの環境を選択している。

生態・生息環境

樹洞やキツツキ、ムササビの古巣に営巣するため、ブナやミズナラなど巨木の多い森林にすむ。山間地の電柱にある洞にも営巣し、巣箱も利用する。食性は昆虫食で、飛翔するセミやトンボ、甲虫などを空中でとらえる。育雛時にアルミ缶の栓や貝殻などを餌とともに巣に運ぶ奇妙な行動をとることも知られている。産卵期 5~6 月、1 腹卵数 3~5 卵、抱卵日数 22~23 日、巣内育雛約 20 日。

生存への脅威(減少の要因)

営巣木となる樹木や木製電柱の撤去が減少を加速している。

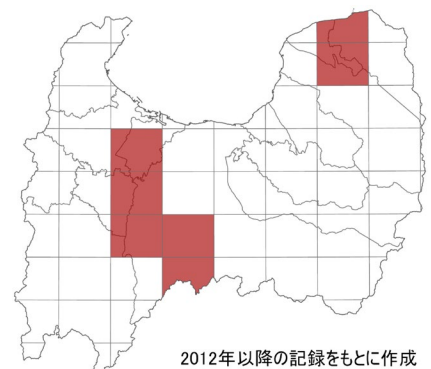
保全対策

生息環境、特にブナ林などの洞にある大径木の保全。積極的な巣箱架設。マナーを守った観察、撮影。

(文責: 高橋 満彦)



撮影: 高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

チゴハヤブサ (ハヤブサ目・ハヤブサ科)

Falco subbuteo

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息数が少ない上、日本の最西端繁殖地として貴重である。生息数も減少している。

形態

全長 31～35cm。オスよりメスの方がやや大きい。頬にヒゲ状の黒斑がある。背面や翼上面は青灰色で、下面は白く黒褐色の太い縦斑がある。成鳥は、下腹部が赤褐色。

国内の分布状況

夏鳥として渡来し、北海道や東北地方で繁殖する。国内繁殖地の西限として長野市内(1994 年以降)が報告されていたが、2008 年に富山市で繁殖が初確認された。

県内の分布状況

春と秋の渡りの時期に少数が確認されているが、2008 年に富山市内で北陸初記録となる繁殖行動および 3 羽のヒナの巣立ちが確認された。2008 年の繁殖は、高圧線鉄塔にかけられたカラス類の古巣を利用したものであったため、この巣は電力会社により撤去され、鳥害防止器が設置された。このことにより 2009 年以降は、近隣民家の防風林に営巣地を移し 2013 年まで飛来・繁殖を行った。また、2013 と 2014 年に 1 ペア、2014～2019 年に別の 1 ペアの繁殖が県東部において確認されている。しかし、これら 3 ペアとも現在飛来は確認されていない。

生態・生息環境

山地より平地の農耕地など開けた環境を好む。カラス類の古巣を利用し産卵する。トンボ類やセミ類、小型鳥類などを捕食する。巣立ち後、幼鳥は 1 か月もしないうちに自ら狩りを行う。産卵期 5 月末～6 月中旬、1 腹卵数 2～4 卵、抱卵日数約 28 日、巣内育雛約 30 日。

生存への脅威(減少の要因)

鉄塔を利用した際の安全管理による巣の撤去。
人里で営巣していることから、カメラマンの接近は繁殖障害として脅威となる。

保全対策

電力会社と緊密に情報交換を行い、本種の繁殖が確認された場合には撤去時期を巣立ち後に依頼する必要がある。繁殖期におけるカメラマン対策として、生息地情報の取り扱いについては、細心の注意が求められる。

(文責：小澤 俊樹)



撮影：小澤 俊樹



チゴモズ (スズメ目・モズ科)

Lanius tigrinus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧ⅠA 類

選定理由

近年、全国的に減少しており、県内ではほぼ情報が無い。

形態

全長約 19cm。成鳥オスは、前頭から後頸まで青灰色。過眼線は黒いが眉斑はない。成鳥メスは、目先が白っぽく、脇腹に黒褐色の横斑がある。他のモズ類に比べ嘴が太く、尾は短い。翼には白斑はない。

国内の分布状況

夏鳥として渡来し、主に本州中部から東北地方にかけて繁殖する。繁殖分布は局地的で個体数も少ない。

県内の分布状況

過去には本県で渡りの時期に平野部(例えば高岡古城公園、富山県中央植物園)でも見かけることがあったが、個体数は少なく、近年は県東部の一部で情報があるのみである。1980 年代までは富山市(旧山田村)や南砺市(旧平村)で繁殖個体が確認されたが、近年はよくわかっていない。春の渡りの途中に高山帯で、吹雪により凍死する個体がある。

生態・生息環境

主に丘陵から山地の森林で見られるが、山村の人家周辺の林にもすむ。モズより林内を好むが、暗い林より明るい林を環境選択している。採餌物は昆虫や両生・爬虫類、小型の哺乳類などで、早糞(はやにえ)の習性がある。産卵期 5～6 月、1 腹卵数 3～6 卵、抱卵日数 14～15 日、巣内育雛約 15 日。

生存への脅威(減少の要因)

減少傾向は全国的なもので、繁殖地での森林環境の変化や国外の越冬地で問題(環境変化、捕獲など)があるのかもしれない。詳細はよくわかっていない。

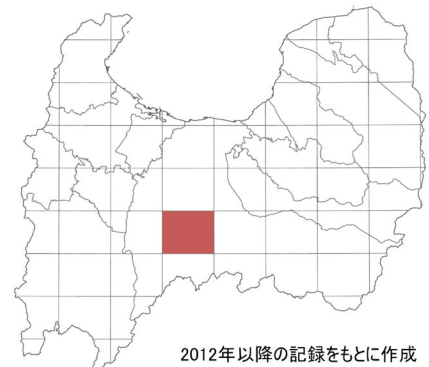
保全対策

生息地の自然環境の保全。

(文責：間宮 寿頼)



撮影：高畑 晃(石川県にて)



アカモズ (スズメ目・モズ科)
Lanius cristatus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧ⅡB類

選定理由

近年、全国的に減少しており、県内ではほぼ情報が無い。

形態

全長約 20cm。オスは頭部から背面は赤褐色。黒い過眼線。額から続く眉斑は白色。下面は淡黄白色。メスはオスに似るが、胸から脇に褐色の波状横斑を有する個体もいる。幼鳥は背面、下面に褐色の鱗状横斑があり、嘴も肉色をおびる。

国内の分布状況

夏鳥として北海道以南に渡来し、繁殖するが、減少傾向にある。

県内の分布状況

過去には個体数は少ないが、渡りの時期に平野部で見かけた。ただ、現在は県西部の一部地域で情報があるのみである。1978 年から 1980 年代前半にかけ連年 5～6 ペアが富山市馬場公園で繁殖したことがある。1992 年には射水市(旧新湊市堀岡)での繁殖記録がある。春の渡りの途中に、高山帯で吹雪により凍死する個体もある。

生態・生息環境

主に平地の河川敷の疎林や公園、海辺に近い山麓部に飛来する。明るい環境を好み、樹上や飛翔する昆虫を捕食することが多い。採餌物は昆虫や両生・爬虫類など他のモズ類に似る。早鶯(はやにえ)の行動が見られる。過去には富山市馬場公園でモズと混在して種間なわばりを作っていた産卵期 5～6 月、1 腹卵数 4～6 卵、抱卵日数約 14 日、巣内育雛約 14 日。

生存への脅威(減少の要因)

減少傾向は全国的なもので、国外の越冬地で問題(環境変化、捕獲など)があるのかも知れない。詳細はよくわかっていない。

保全対策

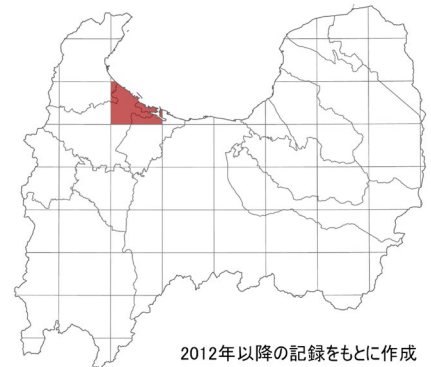
生息地の自然環境の保全。

特記事項

国内希少野生動植物種。



撮影：高畑 晃



(文責：間宮 寿頼)

セツカ (スズメ目・セツカ科)
Cisticola juncidis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息地の改変による生息個体数の減少。

形態

全長約 12.5cm。夏羽は頭上が黒褐色、上面は黄褐色と黒の縦斑があり、尾の先は白い。下面は淡黄褐色。冬羽は頭上が黄褐色で、黒の縦斑がある。

国内の分布状況

本州中部以南で繁殖する。寒冷地の個体は、温暖な地域に移動する。

県内の分布状況

過去には平地の草地で生息・繁殖していたが、近年ほとんど記録がない。県東部の一部地域で情報があるのみであった。神通川や庄川などの河川敷内に好適な繁殖地があったが、草地が開発され消失した。

生態・生息環境

河川や埋立地、耕作放棄地などに生息する。チガヤやトダシバ、ハルガヤのような丈の低い広い草原を好む。採餌物は昆虫やクモなどで、植物の茎を移りながら捕えている。一夫多妻で年 2～3 回繁殖する。その年生まれたメスは、巣立後 1 か月で繁殖に参加するという。産卵期 4～9 月。1 腹卵数 4～8 卵、抱卵日数 12～14 日、巣内育雛 13～15 日。

生存への脅威(減少の要因)

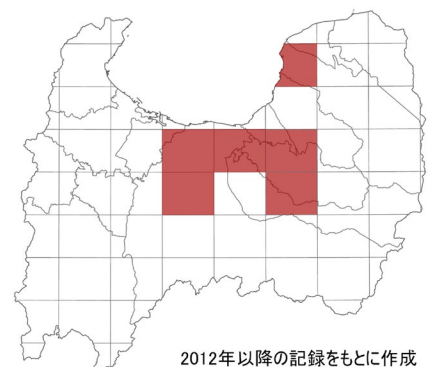
草地環境が改変されると、繁殖環境が消失する。

保全対策

草地環境の保全。



撮影：高畑 晃(沖縄県にて)



(文責：間宮 寿頼)

ヒシクイ (カモ目・カモ科)

Anser fabalis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
(亜種オオヒシクイ 準絶滅危惧)

選定理由

渡来数の減少。

形態

日本に来るヒシクイにはオオヒシクイ *A.f.middendorffii* (全長約 87cm) とヒシクイ *A.f.serrirostris* (全長約 83cm) の 2 亜種がいる。本種はほぼ全身が褐色で尾の基部と下腹部は白い。嘴は黒く、先端近くにオレンジ色の帯がある。亜種ヒシクイは亜種オオヒシクイに比べ、やや小形で嘴は太くて短く、角度が強いなどの違いがある。

国内の分布状況

冬鳥として日本に渡来するが、局地的である。亜種オオヒシクイは主に日本海側の新潟県の福島潟や石川県の片野鴨池・滋賀県の琵琶湖で越冬し、亜種ヒシクイの大部分は宮城県の伊豆沼などで越冬する。亜種オオヒシクイは日本への全渡来数の 8 割と多い。

県内の分布状況

1950 年代までは県内でも狩猟されていた。近年は、年により上空を飛翔する個体や湿地、河口などでの記録はあるが、定着地はない。

生態・生息環境

群れ生活をし、警戒性が強い。県内では埋立地、河川や水田など人の近づけない見通しの効く場所で生活する。時にはハクチョウの越冬地などにも飛来することがある。食性は草本の種子やイネの落ち穂・二番穂などの植食性。隊列飛行をする。

生存への脅威 (減少の要因)

湿地の埋立てや圃場(ほじょう)整備・乾田化により渡来する環境が消失しつつある。

保全対策

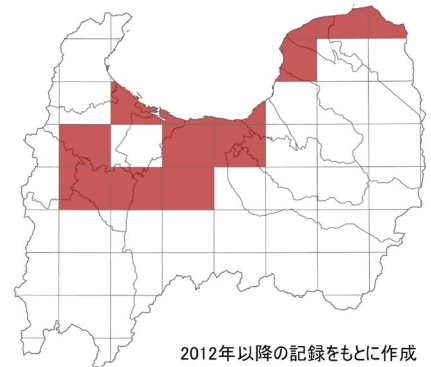
湿地・池沼など生息地の保全。

特記事項

国指定天然記念物。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

マガン (カモ目・カモ科)

Anser albifrons

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

渡来数の減少。

形態

全長約 72cm。全体褐色で胸部に数本の黒い横縞がある(若鳥にはない)。嘴は肉色で、成鳥には額から嘴にかけて白い部分がある。足はオレンジ色。

国内の分布状況

冬鳥として日本に渡来するが、伊豆沼・片野鴨池・琵琶湖・宍道湖などのような大きな群れの越冬地は少ない。東北地方北部より北方では旅鳥。隣接の新潟・石川の両県にはそれぞれ 1,500~2,000 羽近くが集団越冬している。

県内の分布状況

1950 年代までは旧射水郡や氷見・黒部市内の湿地などに銃猟や網猟で捕獲されるほど生息していたが、今は生息環境も変わり姿はない。年により、降雪時に県内のあちこちで上空を飛翔する個体や池沼、湿地での休息個体の記録がある。ハクチョウの越冬地に帯同することもある。

生態・生息環境

群れ生活を行い警戒性が強く人を寄せない。河川や水田などの広い耕地で採餌する。積雪期に下新川郡内に数十羽の群れがしばしば飛来する。食性は植食性でイネの落ち穂や二番穂、水田植生などを採餌する。群飛するときは斜線や鉤状になり飛行する。

生存への脅威 (減少の要因)

県内では湿地の埋立てや圃場整備・乾田化が進み、ガン類が越冬する環境が激減した。

保全対策

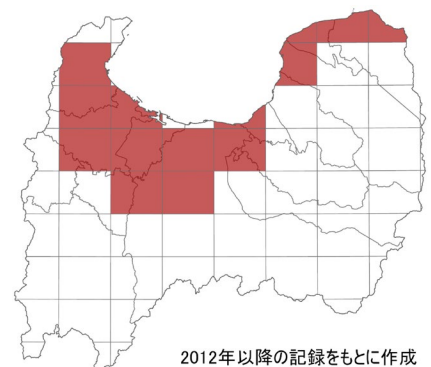
湿地・池沼など生息地の保全。

特記事項

国指定天然記念物。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

トモエガモ (カモ目・カモ科)

Sibirionetta formosa

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

極東地域の固有種。個体数が減少している。

形態

全長約 40cm。小形のカモ。オスの顔面には黄白色と黒色、緑色に光る巴模様が有る。肩羽が飾り羽となる。メスは嘴の付け根に円形の白斑がある。

国内の分布状況

冬鳥として渡来する。数万羽の大群を作ることがあるため、年により渡来数に変動があり、短期的な観察個体数の増加をもって保全カテゴリーを変更することには慎重を要する。

県内の分布状況

春と秋の渡りの時期には、年により数十、数百の大群で池沼に渡来する。近年の渡来数は増加傾向にあるが、長期的には波がある。

生態・生息環境

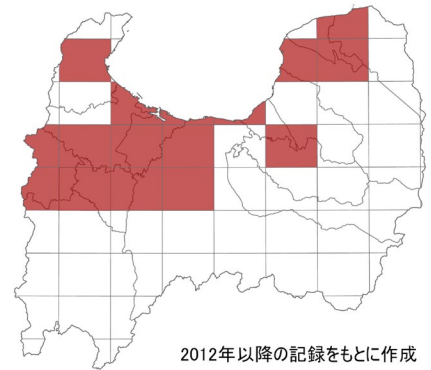
丘陵地の沼地や河川、貯水場の水面などに生息する。溜池では、他のカモ類と共に見られるが、大きな水面を有する溜池を好む。食性はほぼ植食性で、夜間に湿田や小川に飛来し、落ち穂や草の種子などを採餌する。

生存への脅威（減少の要因）

1960 年代頃まで大群が渡来した富山市古洞池や射水市の恩坊池には、堤防の嵩上げなどにより渡来しなくなった。富山平野の水田の乾田化が進み、夜間の採餌環境も変わった。

保全対策

生息環境の保全、鉛散弾の規制による水質保全。



(文責：高橋 輝男)

ヨタカ (ヨタカ目・ヨタカ科)

Caprimulgus jotaka

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

近年、全国的に減少しており、本県において絶滅の危機が大きい。

形態

全長約 29cm。全身褐色、白色、黒色の虫食い状の枯れ葉模様で、保護色となるため、目視では探しづらい。嘴は小さいが、口は非常に大きく開く。オスの尾には白斑がある。

国内の分布状況

夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する。全国的に減少が著しいとされたが、分布域が回復傾向とする調査結果もある。ただし、飛翔性昆虫を空中採餌する鳥類は、全般的には減少傾向にある。

県内の分布状況

平地から山地にかけ分布するが、個体数は少ない。1980 年代頃までは、各地で姿や声・巣卵が記録されたが、その後観察例は減少した。ただし、調査方法の習熟により観察例が増える可能性はある。

生態・生息環境

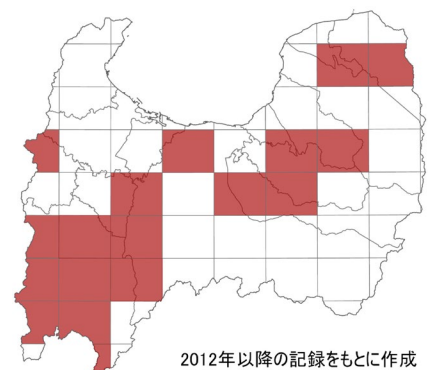
草木が散在する落葉広葉樹林や、スギ造林地の下草が少なく地表の乾いた明るい林を好む。木の枝に乘るように平行にとまる。日没前後から夜間にかけて羽音を立てずに身軽に飛び回り、飛翔性の昆虫を捕食する。地上に浅い窪みを作り直接産卵する。産卵期 5～7 月、1 腹卵数 2 卵、抱卵日数約 19 日、孵化後約 22 日で飛ぶ。

生存への脅威（減少の要因）

里山の林が管理放棄によりうっ閉状態となり、繁殖環境が劣化していることや、昆虫の減少にも減少の原因があると思われる。

保全対策

繁殖地の環境保全、適度な間伐などの人工林の手入れ、殺虫性農薬の散布抑制等。



(文責：高橋 満彦)

ササゴイ (ペリカン目・サギ科)
Butorides striata

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

繁殖できる環境が減少しており、個体数も減少している。

形態

全長約 52cm。ゴイサギに似るが小形で、背中と腹は淡青灰色。翼は濃青灰色で各羽には白い羽縁がある。頭部上面は青味のある黒色で、後頭には長い冠羽がある。虹彩と足は黄色。

国内の分布状況

夏鳥として本州・四国・九州に渡来し繁殖する。九州南部から南西諸島で一部越冬する。

県内の分布状況

2012 年以降では、主に神通川や常願寺川の下流域で確認されている。他地域での記録は僅かしかなく、黒部市の平野部で稀に確認されている。繁殖個体数は少ないと推測される。

生態・生息環境

開けた河畔などで、小魚や甲殻類などの獲物を待ち伏せする。昆虫や木の葉などを疑似餌として水面に投げ入れ、近寄ってきた魚を捕らえることが知られている。疎林やスギ林の横枝に粗雑な巣を作る。昼夜とも活動する。1 腹卵数 2～4 卵、抱卵日数 21～25 日、巢内育雛約 20 日。

生存への脅威（減少の要因）

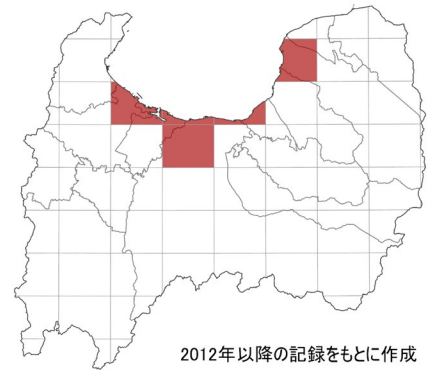
営巣する林や藪が伐採、整地されやすく、繁殖の圧迫要因となっている。また、河川改修などにより魚類などの餌生物が減少している。

保全対策

繁殖地周辺の水辺環境の保全。



撮影：木村 知晴



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

ハチクマ (タカ目・タカ科)
Pernis ptilorhynchus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

丘陵帯から山地帯にかけ生息するタカで、繁殖個体数は少ない。

形態

全長約 57～61cm。翼開長 121～135cm。オスよりメスの方がやや大きい。色彩変異が多く、下面全体が白っぽい淡色型から灰褐色の強い暗色型、またその中間的な中間型など個体差が大きい。喉と胸の境に太い黒斑を有する個体が多い。尾に数本の黒帯がある。虹彩はオスでは暗褐色～赤褐色、メスは黄色。

国内の分布状況

夏鳥として日本全土に渡来するが、繁殖は、北海道、近畿以北の本州。近年、四国、九州でも繁殖が記録された。生息数は多くない。

県内の分布状況

渡りの時期には、県内各地の丘陵帯から山地帯で確認され、多い日は数百羽を超える。繁殖も県内各地で確認されているが、生息数は多くはない。

生態・生息環境

ハチ類や他の昆虫、爬虫類などを採餌する。特にクロスズメバチなどのジバチ類を好む。繁殖開始は遅く 6 月頃に産卵、8 月頃に巣立つ。育雛にハチ類の幼虫を多く給餌する。1 腹卵数 1～3 卵、抱卵日数 35 日前後、巢内育雛 35～45 日。

生存への脅威（減少の要因）

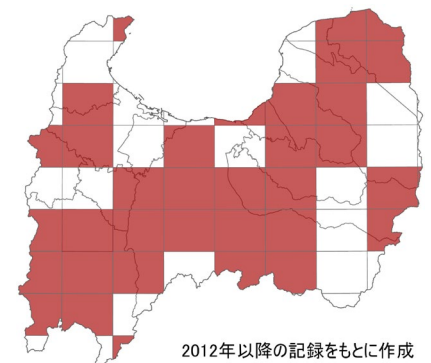
雑木林の管理放棄により、生物生産性の低い林分となり、好適な繁殖環境が減少傾向にある。

保全対策

管理放棄された雑木林や植林地の適正な管理。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：小澤 俊樹)

クマタカ (タカ目・タカ科)
Nisaetus nipalensis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧ⅡB類

選定理由

限られた生息数であること。山地の利用や開発等により生息・繁殖環境の悪化が危惧される。

形態

全長約 70～80cm。翼開長 140～165cm、後頭に冠羽、脚（跗蹠(ふしよ)）まで羽毛を有す。尾には数本の黒帯がある。飛行時は日本産タカ類中で最も翼幅が広く、後縁部が広がる。オスよりメスの方が大きい。幼鳥は全体が白っぽい。虹彩は加齢とともに薄い青灰色→黄色→橙赤色へと変化する。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州の山地帯に生息する。

県内の分布状況

留鳥として里山周辺から標高 2,000m を超える山地帯に広く生息する。行動圏内で通年生活することが多いが、非繁殖期には隣接ペアの行動圏を越えて大きく移動することもある。

生態・生息環境

1 年中、多くは行動圏内で生活する。ブナやミズナラ・トチ・アカマツ・スギ・モミなどの巨木に営巣する。近年、拡大造林期に植えられたスギが大きく成長していることからスギでの営巣が多い。3 月頃に産卵し、巣立ち後は 7～8 月となる。食性は、ヤマドリやカケス、ノウサギ、リス、ヘビ類の肉食性。1 腹卵数 1 卵、抱卵日数 48～50 日、巣内育雛約 70 日。

生存への脅威（減少の要因）

森林伐採や山地開発による繁殖障害のほか、行楽やカメラマンなどの山奥までの立入りによる外圧で繁殖放棄が見られる。

保全対策

肉食性の猛禽ゆえに生息地の森林生態系の保全と繁殖期の営巣地への立入規制が求められる。営巣林となる伐期をむかえた人工林管理にも注意が必要。繁殖妨害回避のため、営巣地情報の取り扱いには、細心の注意が求められる。

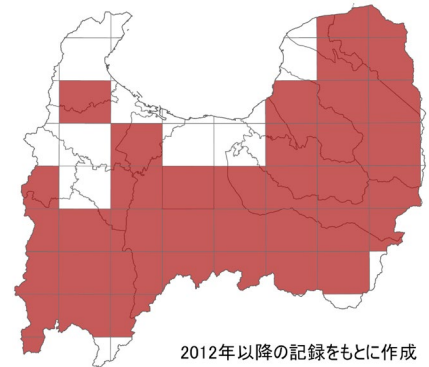
特記事項

国内希少野生動植物種。

(文責：小澤 俊樹)



撮影：小澤 俊樹



2012年以降の記録をもとに作成

ツミ (タカ目・タカ科)
Accipiter gularis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内の繁殖個体数は少ない。

形態

全長約 27～30cm。翼開長 51～63cm。日本産タカ類中で最も小型。オスよりメスの方が大きい。頭と背面は暗灰色から青灰色。オスの下面は一様に淡褐色で、明らかな横斑はない。メスの下面は白色で灰褐色の横斑がある。オスの虹彩は暗赤色、メスは黄色。

国内の分布状況

夏鳥または留鳥として全国各地で繁殖する。積雪地帯など北方の個体は、暖地に移動し越冬する。

県内の分布状況

留鳥または冬鳥として生息する。繁殖期の確認例は少数であるが、山地帯のスギ林や針広混交林などで繁殖する。渡りの時期には、県内の山地帯の広い範囲で確認される。

生態・生息環境

山地に生息し繁殖する個体が多いが、都市部では孤立林や公園等の独立木でも繁殖する。冬期や渡りの時期には農耕地や住宅街にも現れる。食性は、主に小型鳥類であるが、コウモリ類や爬虫類、昆虫なども捕食する。産卵期 4 月中旬～5 月上旬、1 腹卵数 2～5 卵、抱卵日数 25～30 日、巣内育雛約 30 日。

生存への脅威（減少の要因）

人工林を含む大径木林の伐採や各種開発により営巣環境の消失を招く。

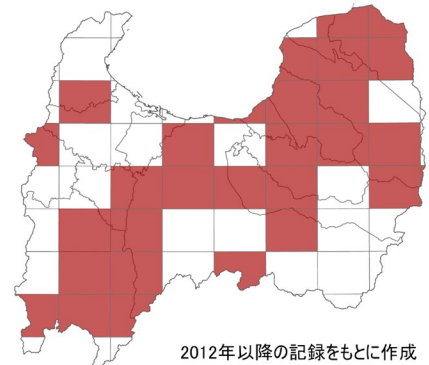
保全対策

落葉広葉樹林の保全や針葉樹の人工林などの針広混交林化を図るなど、生物多様性を高めることが望まれる。

(文責：小澤 俊樹)



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

ハイタカ (タカ目・タカ科)

Accipiter nisus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

森林性猛禽として生態系の頂点に位置する。県内の繁殖個体数は極めて少ない。

形態

全長約 30～40cm。翼開長 62～79cm。日本産鳥類で雌雄差の著しいものの 1 つ。オスの体重はメスのほぼ半分。翼は短く尾は長い。オスの背面は暗青灰色、下面には赤褐色の横斑がある。メスの背面は灰褐色、下面には褐色の横斑がある。雌雄とも尾には数本の黒色横斑がある。第 3 趾は、異常に長く発達し、獲物を効率よく捕獲できる。虹彩は、橙色から淡黄色まで雌雄・年齢差がある。

国内の分布状況

北海道と本州の山地で繁殖し、越冬期は全国に分布する。

県内の分布状況

留鳥または冬鳥として生息する。繁殖期の確認例は非常に少数であるが、標高 1,000m 以上の針広混交林などで繁殖する。秋から冬期は平地や河川敷に多く、山地帯でも広く確認される。

生態・生息環境

森林性のタカであるが、秋から冬には河川敷やヨシ原にも現れる。ヒヨドリ位までの小型鳥類を狩るほか、ネズミ類や昆虫も捕食する。産卵期 4 月末～5 月中旬、1 腹卵数 4～5 卵、抱卵日数 31～42 日、巢内育雛 25～30 日。

生存への脅威（減少の要因）

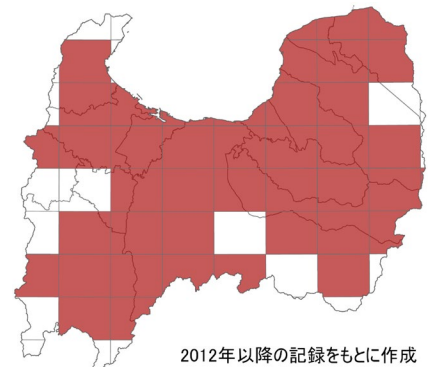
営巣適地である森林の伐採や各種開発により営巣環境の消失が心配される。

保全対策

極相に近い落葉広葉樹林・針広混交林の保全、生物多様性を高めることが望まれる。



撮影：小澤 俊樹



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：小澤 俊樹)

オオタカ (タカ目・タカ科)

Accipiter gentilis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

山地帯から街中まで生息しているため、人の生活活動の影響を受けやすい。

形態

全長 47～59cm。翼開長 105～130cm。オスよりメスの方が大きい。成鳥は、頭から背面、尾は灰黒色から青灰色。下面は白く灰黒色の横斑が全体にある。白い眉斑がある。足は黄色。幼鳥・若鳥は全身淡褐色で下面には黒褐色の縦斑がある。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州に生息し、繁殖する。四国、九州でも繁殖はするが、西日本には少ない傾向にある。

県内の分布状況

低山帯から山地帯が主な繁殖地であるが、街中の民家防風林などでも繁殖する。山地帯の繁殖地では、数年で確認されなくなることが多く、減少が心配される。冬期は河川や海岸などの疎林、農耕地、人家周辺にも出現する。

生態・生息環境

低山帯を中心に街中から山地帯に生息し、繁殖する。森林と開けた場所が入り混じる環境を好み、アカマツやスギ、モミなどの大木を営巣木として選択する。食性は小型鳥類からヤマドリなどの鳥類を中心に小型哺乳類や爬虫類なども捕食する。産卵期 3～5 月、1 腹卵数 2～4 卵、抱卵日数 35～40 日、巢内育雛 35 日前後。

生存への脅威（減少の要因）

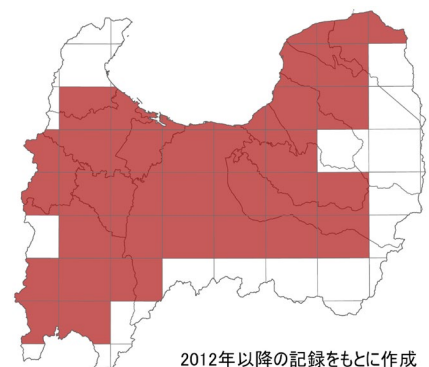
里山で繁殖するペアもいるため、各種開発による生息環境の悪化、植林伐採や行楽、散策、カメラマンなどの立入りによる繁殖妨害など人為的影響を受けやすい。また、松枯れや熊剥ぎによるアカマツ・スギの枯死など営巣木の減少も心配される。

保全対策

里山の生産性の高い生態系の保全や遊歩道整備の際の注意。また営巣木の確保のためにアカマツのマツクイムシ対策が望まれる。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：小澤 俊樹)

オオワシ (タカ目・タカ科)

Haliaeetus pelagicus

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

極東アジアの特産種で、県内へは冬鳥として稀に渡来する。

形態

全長約 85~102cm。翼開長 220~250cm。オスよりメスの方が大きい。成鳥では全体黒褐色で尾羽や肩、すねの羽色は白色。尾羽は長いくさび形。幼鳥は全身が暗褐色で翼の一部に白斑が混じる。尾は白いが黒褐色斑が混じる。体の羽色は加齢につれ変わる。嘴は大きく橙黄色。

国内の分布状況

冬鳥として主に北海道へ、少数は本州中部地方まで渡来する。羅臼から根室にかけては主要な越冬地になっている。

県内の分布状況

例年の渡来数はオジロワシより少なく、渡り途中や越冬期に記録される。県東部での記録が多い。

生態・生息環境

国内での繁殖はなく、多くはカムチャッカ半島で繁殖する。オジロワシと同様、生息地は海岸や大きな河川などの水環境と、ねぐらとなる近くの森林に依存している。冬期、各種の魚類のほかカモ類やノウサギなども捕獲したり屍肉を採餌したりする。

生存への脅威(減少の要因)

風力発電施設(風車)への衝突や採食中の交通事故死、また狩猟により放置された狩猟獣の肉と一緒に銃弾やその破片を吞み込み、鉛中毒で死亡する個体も多数いる。

保全対策

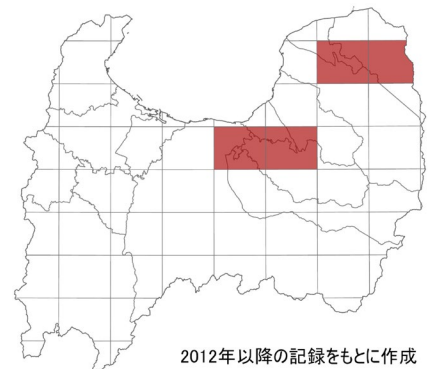
越冬地および移動ルート周辺での風力発電施設や送電線建設の計画をしない。越冬地の環境保全。獲物の処置についての狩猟者指導や狩猟用の鉛弾を無毒性スチール弾に変換する措置が必要である。

特記事項

国内希少野生動植物種、国指定天然記念物。



撮影: 高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責: 小澤 俊樹)

オジロワシ (タカ目・タカ科)

Haliaeetus albicilla

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

海岸、河川などの水界生態系の頂点に位置し、個体数も少ない。

形態

全長 80~95cm。翼開長 180~230cm。オスよりメスの方が大きい。成鳥の体色は茶褐色で尾羽は白色。若鳥は全身褐色で尾羽は齢を重ねるごとに白色部が増す。虹彩も加齢につれ黄色くなる。嘴と足は淡黄色。飛翔時の翼形は長方形、尾はくさび形に見える。

国内の分布状況

北海道では、170 ペアほどが繁殖する。また冬鳥として北海道を中心に本州にも渡来するが、稀に九州および琉球列島にも飛来する。

県内の分布状況

大きな河川や湖沼などに冬鳥として少数渡来する。山地帯から海までを、また複数の河川を行き来し、カモ類の集団越冬地ではカモを襲い捕食する。県東部の河川には、ほぼ例年、定期的に渡来する。

生態・生息環境

北海道では、海岸や河川・湖沼周辺の大木に巣をかけ繁殖する。水辺で衰弱したカモやカモメ、ハト類、魚類などを捕食。屍肉も採餌する。ねぐらとして近くに大木のある森を必要とする。産卵期 3 月中旬~4 月上旬、1 腹卵数 1~2 卵(稀に 3~4 卵)、抱卵日数 37~40 日、巢内育雛 70~90 日。

生存への脅威(減少の要因)

風力発電施設(風車)への衝突や送電線での感電死、また狩猟により放置された狩猟獣の肉と一緒に銃弾やその破片を吞み込み、鉛中毒で死亡する個体も多数いる。

保全対策

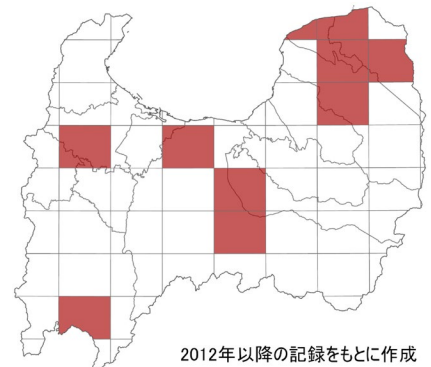
生息地および移動ルート周辺での風力発電施設や送電線建設の計画をしない。越冬地の環境保全。獲物の処置についての狩猟者指導や狩猟用の鉛弾を無毒性スチール弾に変換する措置が必要である。

特記事項

国内希少野生動植物種、国指定天然記念物。



撮影: 高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責: 小澤 俊樹)

サシバ (タカ目・タカ科)
Butastur indicus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

山地帯に広く渡来するタカであるが、近年繁殖地での安定した生息が見られず生息数が減少している。

形態

全長約 50cm。カラス大の鳥で、全体褐色。オス成鳥は、頭部が青灰色をしており、メス成鳥や幼鳥は白い眉斑がある。オスよりメスの方がやや大きい。

国内の分布状況

夏鳥として東北から九州に渡来し繁殖する。奄美・南西諸島では越冬する。春・秋の渡りの折には集団で移動する。

県内の分布状況

里山から山地帯で繁殖する。渡りの時期には、日に数百羽のまとまった移動が確認されることもある。

生態・生息環境

4 月上旬頃に渡来し、県内では山地帯のスギ人工林を繁殖地として利用することが多い。林縁部や周辺の農耕地でカエルやヘビ、トカゲ、ネズミ、昆虫類などを採餌する。

産卵期 5 月頃、1 腹卵数 2～4 卵、抱卵日数 30 日前後、巣内育数約 35 日。

生存への脅威（減少の要因）

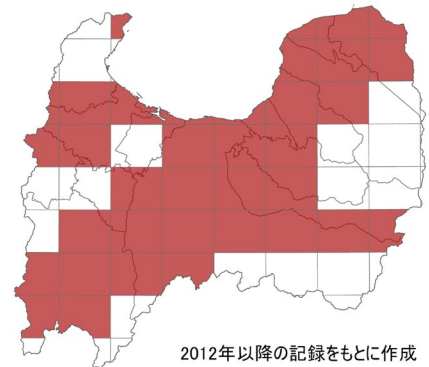
採餌場所は森林に近い田畑、湿地、草地など開けた場所が多く、山間地における水田や耕作地の放棄、農薬の使用などにより採餌場所や餌資源が減少している。里山環境の変化。

保全対策

近年、繁殖地の長期利用が見られなくなっていることから、環境への負担の少ない農・林業の促進が重要である。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：小澤 俊樹)

アオバズク (フクロウ目・フクロウ科)
Ninox japonica

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年減少が著しく、絶滅の危機が増大しているため。

形態

全長 27～30.5cm。翼開長 66～70.5cm。羽角のない丸い頭。上面は黒褐色。下面は白色に黒褐色の太い縦斑がある。虹彩と足は黄色。

国内の分布状況

日本のほぼ全土で、夏鳥として渡来・繁殖する。沖縄県では越冬する。夜行性のため発見しづらく、調査例は少ないが、全国的に記録が減少している。

県内の分布状況

県内各地の平地から丘陵の大きい樹木のある林に生息する。巨木のある公園や社寺境内、人家の庭にもすみつく。1980 年代前半頃より生息個体数が減少し、さらに近年、巨木も少なくなり追い討ちをかけている。

生態・生息環境

ケヤキやサクラなど巨木の洞に営巣する。夜行性で、飛行しながらセミ、蛾、甲虫など大形の昆虫類、時には、コウモリや小鳥を採餌する。街灯に集まる昆虫を求めて飛来することもある。1 腹卵数 2～5 卵、抱卵日数約 25 日、巣内育雛約 28 日。

生存への脅威（減少の要因）

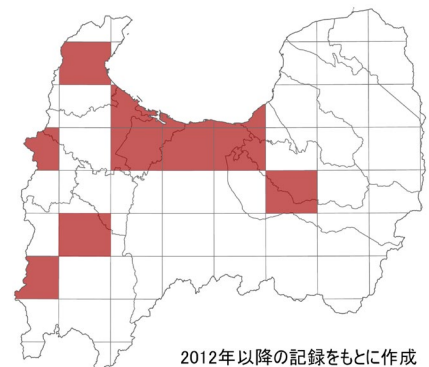
社寺林を含めた人里の大径木の減少、広葉樹のスギへの林種転換なども営巣に影響を与える。昆虫の減少も影響しているおそれがある。カメラマンやバードウォッチャーの人气が高く、営巣中つがいに悪影響を与えた事例も知られている。

保全対策

樹洞を有する大径木の保全、積極的な巣箱架設。マナーを守った観察、撮影。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 満彦)

コノハズク (フクロウ目・フクロウ科)

Otus sunia

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

比較的普通に記録されていたが、近年、確認例が少なくなっており、生息数の減少が懸念される。

形態

全長 18~21cm。雌雄はほぼ同色。体は灰褐色で、褐色・黒色・灰色などの複雑な斑紋がある。眼は黄色。長い羽角を夜間はたたみ、日中は立てている。

国内の分布状況

九州以北に夏鳥として渡来する。

県内の分布状況

夏鳥として、かつては県内全域の山地の森林で確認されていた。また、渡りの時期には、平地や山麓でも、特徴ある鳴き声が聞かれていた。2012 年以降では、南砺市、富山市などで確認されているが、生息個体数の減少が懸念される。姿を見る機会が少ないため、詳しい繁殖状況も不明である。

生態・生息環境

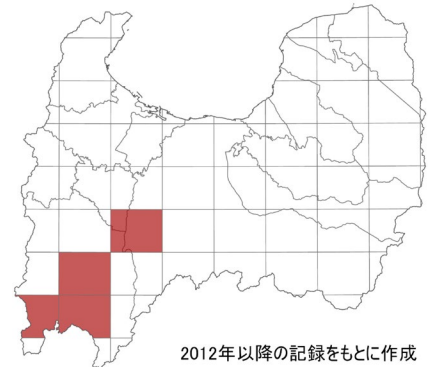
平地から山地の林。単独かつがいで生活する。日中は木陰や樹洞などで休息し、夕暮れに活動しはじめて、主に昆虫類を食べる。

生存への脅威（減少の要因）

開発による大木の伐採やスギの植林などにより、繁殖環境が狭小化している。

保全対策

樹洞を有する大径木の保全。



(文責：藤島 光俊)

オオコノハズク (フクロウ目・フクロウ科)

Otus semitorques

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年、減少傾向にあると思われ、存続基盤が脆弱なため。

形態

全長 23cm。体長は褐色で、黒色と灰白色の複雑な虫食い斑がある。頭部には大きな羽角がある。虹彩はオレンジ色。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州。夜行性で観察が難しく、情報の少ない種である。

県内の分布状況

平地から低山帯の林地に生息する。秋から春には、農耕地や市街地でも見ることがある。1980 年代までは普通種であったが、その後は目撃情報が減少しており、2012 年以降の観察例は 4 例であった。

生態・生息環境

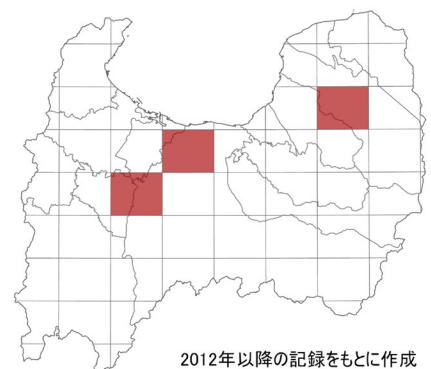
生息域の中核は、標高 700~1,500 m 程度の低山域の落葉広葉樹林であるといわれる。越冬期などは平地の公園や社寺林、屋敷林などに生息する。落葉広葉樹を好む傾向があるとされる。日中は、茂った木に止り休息している。夜行性でネズミ等の小型哺乳類や小鳥、昆虫などを採餌する。巣は樹洞を利用する。1 腹卵数 4~5 卵。抱卵や育雛日数に関する詳細は不明。

生存への脅威（減少の要因）

情報が少なく評価が難しいが、平地においては、人里の大径木の減少などにより、繁殖環境が狭小化しているおそれがある。

保全対策

樹洞を有する大径木の保全、巣箱架設による営巣支援。



(文責：高橋 満彦)

トラフズク (フクロウ目・フクロウ科)

Asio otus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年、確認例が減少しており、生息個体数の減少が懸念される。

形態

全長 35～40cm。中形の種で羽角は長い。羽色は、白っぽいものから茶色っぽいものまで個体変異が多い。

国内の分布状況

留鳥、または冬鳥。ほぼ全国に生息する。本州中部以北の林で繁殖し、本州以南で越冬する。

県内の分布状況

県内には主に冬鳥として渡来し、秋から冬にかけて、平地や低山で大きい木のある所に生息する。水田地帯や河川敷に生息していることもある。かつては、農耕地に隣接した寺社林で、複数羽いるところを確認された年もあった。2012 年以降では、黒部市、射水市、高岡市などで記録されている。また、繁殖期の 6 月に立山町で記録された例もある。近年の記録は減ってきており、全く確認されない年もある。

生態・生息環境

平地から山地の林、河原、農耕地など。繁殖期はつがいですぐ生活し、越冬期は数羽で群れることもある。日中は暗い林内で休息し、夕暮れから活動しはじめる。主にネズミを捕り、カエルや小鳥なども食べる。

生存への脅威（減少の要因）

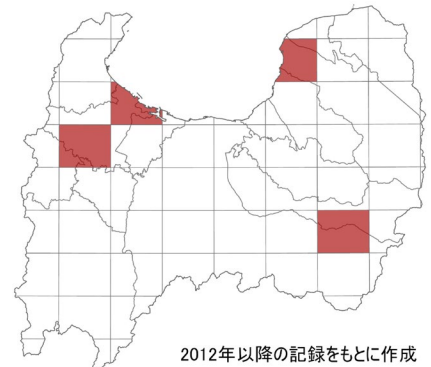
生息環境の消失。

保全対策

生息の情報収集と、安眠な生息環境の維持。



撮影：高畑晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：藤島 光俊)

コミミズク (フクロウ目・フクロウ科)

Asio flammeus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年、確認例が減少しており、生息個体数の減少が懸念される。

形態

全長 35～41cm。羽角は短く、羽色は白っぽいものから褐色みが強いものまで、個体変異がある。

国内の分布状況

冬鳥としてほぼ全国的に渡来し、海岸や水田、川岸、埋立地など、広々とした草地で生活する。

県内の分布状況

渡来数には年による増減が大きいですが、県内各地の広々とした農耕地や草原、河原などに生息しており、複数羽で観察されることもあった。ところが、2012 年以降では、富山市、射水市の一部でしか確認されていない。近年では、全く確認されない年もあり、越冬数の減少が懸念される。

生態・生息環境

日中は草丈が低い一定の草地で休息する。寒冷地では午後から、暖地ではそれより遅く活動しはじめる。主にネズミを食べ、多く捕れると畔のくぼみや草むらに保存する。

生存への脅威（減少の要因）

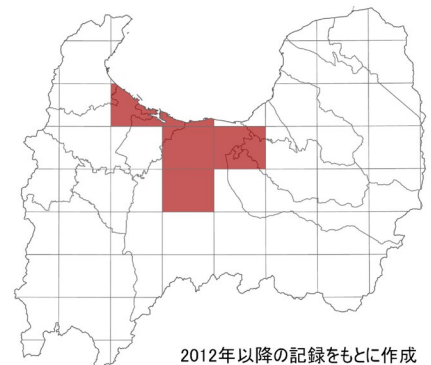
湿地の消失や草地開発、乾田化事業により生息環境が劣化している。

保全対策

湿地や草地など生息環境の保全。



撮影：高畑晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：藤島 光俊)

ヤマセミ (ブッポウソウ目・カワセミ科)

Megaceryle lugubris

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー: 該当なし

選定理由

採餌物の減少と営巣環境の変化・消失などで生息個体数が減少している。

形態

全長約 38cm。上面は白と黒の鹿の子模様、下面は白く、オスは顎線と胸に、メスには翼下面の下雨覆に錆色がある。頭は冠羽状。嘴は黒っぽく、足は小さく合趾足（ごうしそく）。

国内の分布状況

九州以北の里山から低山の河川、湖沼などに留鳥または漂鳥として生息するが、生息数は少ない。

県内の分布状況

県内の河川上流域や山地の溪流やダム湖に分布する。留鳥として繁殖するが、多雪地域の個体は、冬期下流域に移動する。

生態・生息環境

川面へ張り出した枝上や岩上から、あるいはホバリングして水中に突っ込み、嘴で魚類やカエル、サンショウウオなどを捕らえる。主な魚類は 5～20cm のイワナ、ヤマメ、アブラハヤ、ウグイなどで、不消化物はペリットとして吐き出す。溪流畔の土質の崖や土取り場の土手に嘴で横穴を掘り営巣する。ペアでなわばりを有するが、冬は時間や場所を違えて別行動をとる。産卵期 3～6 月、1 腹卵数 4～7 卵、抱卵日数約 20 日、巣内育雛 32～36 日。

生存への脅威（減少の要因）

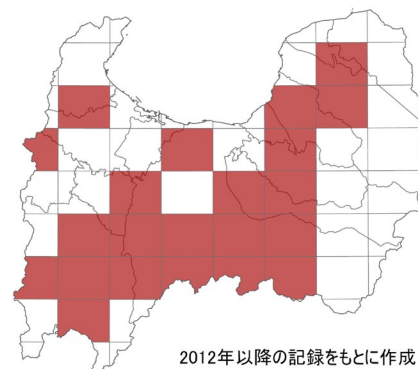
生息地において各種法面工事により営巣環境が消失しつつあることや溪流の釣り人の増加により採餌行動が攪乱されている。

保全対策

採餌場と河川や営巣崖地を含めた生息環境の保全。魚類捕獲禁止区域の設定。



撮影: 高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責: 高橋 輝男)

ハヤブサ (ハヤブサ目・ハヤブサ科)

Falco peregrinus

富山県 2025 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

海岸や河川環境の生態系の頂点に位置する。県内の繁殖個体数は少なく、分布も局地的である。

形態

全長約 38～51cm。翼開長 84～120cm。オスよりメスの方が大きい。背面は青灰色、顔にひげ状の黒斑がある。下面は白く、黒の横斑が密にある。蠟膜(ろうまく)とアイリング、足は黄色。幼鳥の背面は暗褐色、下面は淡褐色で褐色の縦斑がある。

国内の分布状況

北海道から九州まで生息し、繁殖する。岩壁のある海岸や島嶼、河畔の崖が主な繁殖地となっている。ビルのテラスや鉄塔などの人工物での繁殖も確認されている。また、繁華街の明かりを頼りに夜間狩りをする個体もいる。

県内の分布状況

県内の海岸部には、崖地が少ないものの、海岸部や河川敷、山岳地の崖などを利用し繁殖する。冬季には、河川敷や農耕地、街中での確認が多い。個体数は少ないものの、やや増えている。

生態・生息環境

海岸部や河川敷、埋立地、農耕地など開けた場所に生息する。飛行する小型から中型鳥類を空中で直接または蹴落として捕獲する。産卵期 3～4 月、1 腹卵数 3～4 卵、抱卵日数 30～33 日、巣内育雛 35～40 日。

生存への脅威（減少の要因）

道路建設や落石防止工事などの開発行為、営巣地周辺への立入りなどが生存を脅かす原因となりうる。観察者やカメラマンによる繁殖中の営巣地への過度な接近も繁殖妨害となる。

保全対策

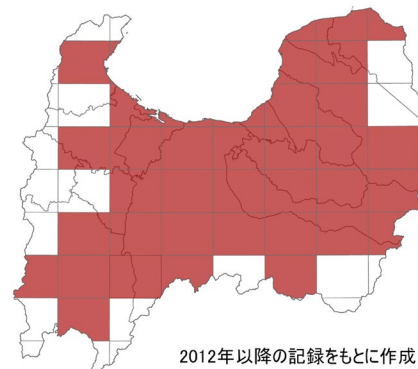
営巣環境の保全と繁殖期の繁殖地周辺への立ち入り規制。

特記事項

国内希少野生動植物種。



撮影: 高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責: 小澤 俊樹)

ノジコ (スズメ目・ホオジロ科)
Emberiza sulphurata

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

本州で繁殖するが、近年、全国的に生息数が減少している。

形態

全長約 14cm。頭や肩は黄緑色、背面は褐色地に黒褐色の縦斑がある。腹面は淡黄色。アイリングは白色。

国内の分布状況

本州中・北部に局地的に繁殖する。本州西南部以南の一部では少数の越冬記録がある。

県内の分布状況

本県には、夏鳥として低山帯に渡来する。渡りの時期には、市街地の公園や庭先などでも見られるが、局所的で南部、西部の山地にはやや多く繁殖している。婦中鳥類観測ステーションでは、近年の捕獲数が減少している。

生態・生息環境

低山帯の明るい湿地などのある疎林や沢筋、耕作放棄地や道路に面した緩い斜面などを好む。地上で採餌することが多く、草の種子や小昆虫、その幼虫などを食べる。産卵期 5～7 月、1 腹卵数 2～5 卵、抱卵日数約 14 日、巢内育雛 7～8 日。

生存への脅威（減少の要因）

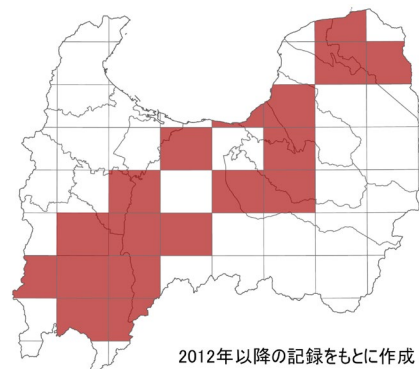
各種の林地開発や各種工事、耕作放棄地の林地への遷移などにより繁殖環境が悪化している。

保全対策

生息環境の保全。



撮影：間宮 寿頼



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：間宮 寿頼)

オオハクチョウ (カモ目・カモ科)
Cygnus cygnus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

渡来数がまとまっていることと、群としての定期的な集団越冬地として日本の南限に位置すること。

形態

全長約 140cm。全体白色。上嘴は黒色で、基部周辺に黄色斑がある。黄色の面積は、黒色の部分より大きい。

国内の分布状況

冬鳥として北海道、本州に渡来するが、北方ほど個体数が多い。越冬地の多くで給餌活動が行われている。

県内の分布状況

定期的な越冬地として富山市山本地内の田尻池、富山市婦中町・八尾町地内の水田、射水市の石畑池、氷見市の布施地区などがあり、例年数十～百羽近程度の群れが飛来する。

生態・生息環境

溜池や池沼などに生息するが、採餌のため大きな河川や水田に降りることもある。食性は植食性で、水生植物の茎や根、水田で落ち穂・二番穂などを採餌する。家族単位の集合体で越冬する。

生存への脅威（減少の要因）

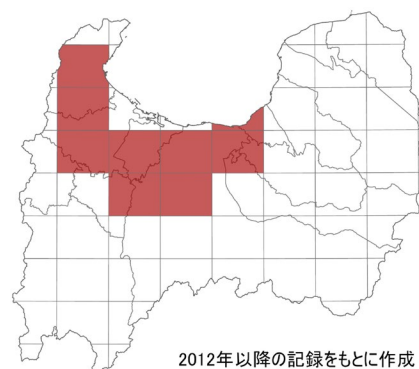
灌漑(かんがい)用溜池は消失の懸念がある。渡来地周辺での架線への衝突死も発生している。また、給餌活動による過密化による鳥インフルエンザ等の感染症の発生の危険も脅威となる。

保全対策

越冬地周辺の生息環境の保全、給餌活動の検討、鉛散弾の規制、生息地での釣り規制、架線の衝突死防止用タグの取り付けなど。



撮影：高橋 輝男



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

ヨシガモ (カモ目・カモ科)

Mareca falcata

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

極東地域の固有種。生息個体数が減少し、局地的な分布となっている。

形態

全長約 48cm。オスは後頭に緑色光沢のナポレオン帽のような冠羽がある。メスは体に斑のある暗褐色。

国内の分布状況

冬鳥として日本に渡来するが、個体数は少ない。北海道では少数が繁殖する。

県内の分布状況

県内の淡水域や湾内、広い河川などの波の静かな環境に渡来する冬鳥であるが、個体数は少ない。マガモやコガモなど他の淡水性非潜水カモ類の群れに混ざって観察されることが多い。小矢部川の中～下流域ではほぼ例年見られるが、県内に定まった集団越冬地は少ない。

生態・生息環境

越冬期の昼間は河川や湖沼、湾内など広い止水域に生息する。小群でいることが多く、薄明時刻や夜間は水田や湿地に移動し、草の種子、茎、根や落ち穂など主に植物質を採餌する。

生存への脅威（減少の要因）

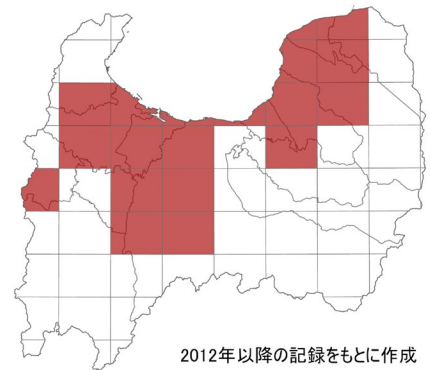
富山平野の乾田化が進み、採餌環境が減少している。狩猟鳥に指定されている。

保全対策

生息環境の保全、鉛散弾の規制、狩猟鳥からの除外。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

シノリガモ (カモ目・カモ科)

Histrionicus histrionicus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息個体数が少ない。

形態

全長約 43cm。オスの体色は、青灰色と赤栗色で、顔や胸に白ペンキをあちこち塗ったような特徴ある色彩をしている。メスは全体黒褐色で目先と耳羽(じう)に白斑がある。

国内の分布状況

冬鳥として主に北日本に渡来する。北海道と青森・宮城・秋田県では少数が繁殖する。

県内の分布状況

海岸や河口域に渡来するが、生息個体数は少ない。

生態・生息環境

海岸の波の荒い岩礁地帯やテトラポット周辺に生息し、潜水しながら貝類、甲殻類などを採餌する。繁殖地は、山地の岩の多い溪流沿いで、草むらや岩陰などに営巣する。1 腹卵数 4～8 卵、抱卵日数 28～29 日、雛は早成性で間もなく巣を離れる。

生存への脅威（減少の要因）

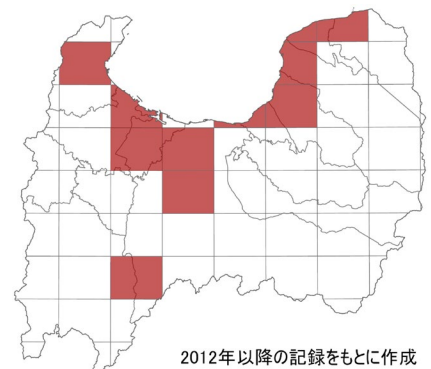
岩礁地の改変により生息環境が劣化する。マリンスポーツや釣りのレジャーボートにより安息な生活環境が壊される。

保全対策

越冬地の海岸護岸整備の方法などにも十分な配慮が望まれる。マリンスポーツなどとの共存・すみわけの検討も望まれる。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

ビロードキンクロ (カモ目・カモ科)

Melanitta stejnegeri

富山県 2025 カテゴリ：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリ：該当なし

選定理由

近年、個体数が急減している。

形態

全長約 55 cm。オスは全身ほぼ黒色で眼の付近に白い三日月斑がある。メスは目先と耳羽(じう)、後頸の3か所に白斑がある。

国内の分布状況

冬鳥として、北海道や本州の東海、北陸以北の沿岸・沖合に渡来する。他の海洋性潜水ガモ類と混群をつくることもある。

県内の分布状況

高岡市から氷見市にかけての富山湾の海上に渡来するが、個体数は少ない。

生態・生息環境

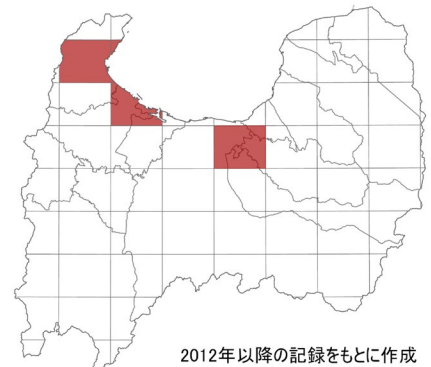
海上に生息し、潜水して貝類や甲殻類、ウニなど水底に暮らす小動物を採餌する。繁殖期は北ヨーロッパ、北アジア、北アメリカのツンドラや亜寒帯の内陸部に生息し、淡水湖、湿地、川沿いの草地など水辺の地上の茂みや樹木の根元の窪みに巣をつくる。1腹卵数7~9卵、放卵日数27~28日。

生存への脅威(減少の要因)

定置網などの混獲が最も懸念されるほか、釣り・マリンスポーツによる攪乱、重油流出など海洋汚染による影響が予測される。

保全対策

海底の動物性餌資源を利用するため、プラスチックごみなどによる海洋汚染の防止が欠かせない。



(文責：高橋 輝男)

クロガモ (カモ目・カモ科)

Melanitta americana

富山県 2025 カテゴリ：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリ：該当なし

選定理由

生息個体数が減少し、局所的な分布となっている。

形態

全長約 48cm。オスは全身黒色で嘴の基部が黄色。メスは全身が褐色で頬に白みがある。

国内の分布状況

冬鳥として本州北部から北海道の沿岸地域に渡来する。北海道では少数ながら繁殖する個体もいる。

県内の分布状況

11月から3月頃までの越冬期に、高岡市から氷見市にかけての海上に渡来するが、個体数は少なく、県内での分布は局所的である。春や秋の渡りの時期に観察されることもある。

生態・生息環境

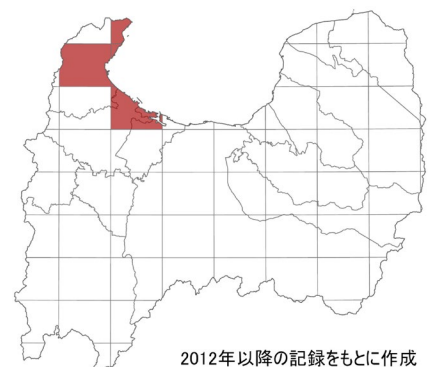
沿岸海域、港湾内、河口、砂浜や岩場付近などの浅い水域に数羽ずつの小群で渡来し、潜水して貝類を中心にエビやカニなどの甲殻類など水底に生息する小動物を採餌する。他の海洋性潜水ガモと混群をつくることもある。

生存への脅威(減少の要因)

越冬環境の開発や、マリンスポーツ・釣りなどによる人的攪乱が懸念される。

保全対策

海岸・河川の護岸整備方法などで、水底の生態系の維持に十分な配慮が望まれる。海底の餌資源を利用するため、プラスチック類などによる海洋汚染は潜在的な脅威となる。



(文責：高橋 輝男)

ホオジロガモ (カモ目・カモ科)

Bucephala clangula

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息個体数が減少した。

形態

全長約 45cm。雌雄とも頭部が大きい。オスの頭部は緑色光沢のある黒色で、嘴の基部に大きな白斑がある。下面、肩羽は白い。嘴は黒く虹彩は黄色。メスの頭部や体はほぼ暗褐色。嘴の先は橙色で先端に黒色部がある。虹彩は黄白色。

国内の分布状況

冬鳥として全国に渡来するが、北日本には比較的多い。

県内の分布状況

富山湾や大河川の中・下流域に渡来するが、個体数は多くない。

生態・生息環境

湾内の浅海域に小群で生息するが、神通川や庄川、小矢部川の中流域にも飛来する。潜水しながら貝類や甲殻類、水生昆虫などを採餌する。1970 年頃までは、河口部に毎年まとまった群れで渡来していたが、近年は減少し、単独か小さな群れでいる。

生存への脅威（減少の要因）

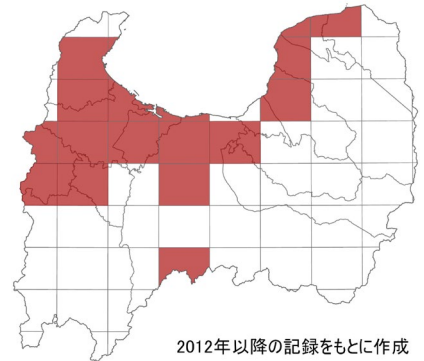
水底の生態系の変化で、採餌物の減少が生息に影響を与えている。マリンスポーツや釣りのレジャーボートが安眠な生息水域を攪乱している。

保全対策

海岸・河川の護岸整備方法などで、水底の生態系の維持に十分な配慮が望まれる。マリンスポーツなどとの共存・すみわけの検討も望まれる。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

ミコアイサ (カモ目・カモ科)

Mergellus albellus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内での生息個体数は少ない。

形態

全長約 42cm。オスは白色の体。眼先、後頭、側胸に黒斑がある。メスは全体暗褐色。頭部の上半分が茶褐色、下半分と頸側は白い。頭上に冠羽がある。

国内の分布状況

冬鳥として九州以北に渡来する。北海道では少数が北部で繁殖するが、基本的には通過する旅鳥である。

県内の分布状況

神通川や小矢部川など大きな河川の河口、運河、漁港、ダム湖などの湖沼で、他のカモ類と混生し越冬する。10羽を越す群れで見られることもある。富山市の富岩運河では例年数羽が越冬していたが、近年見られないこともある。

生態・生息環境

魚食性が強い雑食性で、潜水して主に小型の魚類を捕食するが、甲殻類や貝類、水生昆虫なども採餌する。人に対する警戒性は強い。繁殖期は水辺の樹洞に営巣する。つがいは抱卵期に解消され、雛はメス親が育てる。1腹卵数 6～9 卵、抱卵日数 26～28 日。

生存への脅威（減少の要因）

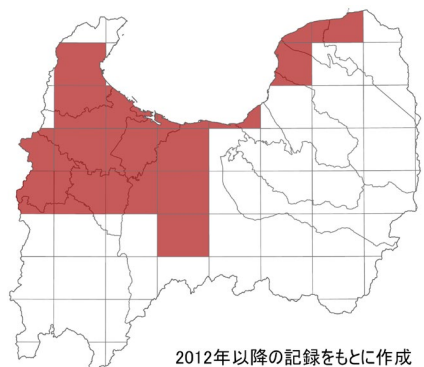
警戒性が強いので、遊覧船やマリンスポーツなどによる生息影響がある。

保全対策

マリンスポーツなどとの共存・すみわけの検討が必要である。



撮影：高橋 輝男



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

ウミアイサ (カモ目・カモ科)

Mergus serrator

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息個体数が減少した。

形態

全長約 55cm。オスの頭部は、緑色光沢のある黒色で、後頭に 2 段からなる冠羽がある。メスは茶褐色で、短めの冠羽がある。雌雄とも嘴、虹彩、足は赤味を帯びる。飛翔時は翼上面の白い部分に 2 本の黒条がある。

国内の分布状況

冬鳥として全国に渡来するが、生息個体数は少ない。

県内の分布状況

沿岸部や大河川の河口部に渡来するが、小群で生息する。1970 年頃までは、狩猟鳥にもかかわらず生息数も多かった。以後、非狩猟鳥に指定替えとなったが、近年も生息数の回復はない。

生態・生息環境

越冬中は、海岸や漁港内、河口などに生息するが、河川にも時々遡上する。潜水し体長 10cm 位までの魚を捕え、水面に浮上して呑み込む。群れで一斉に潜水し共同採餌することもある。

生存への脅威（減少の要因）

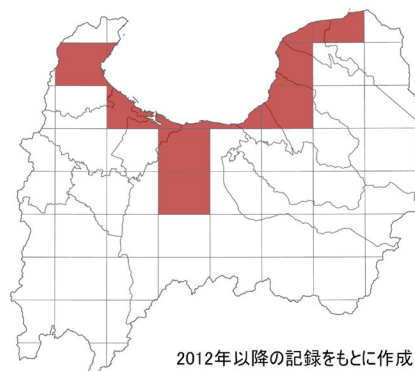
警戒性の強い鳥なので、マリンスポーツなどが生息環境に影響を及ぼすと考えられる。

保全対策

マリンスポーツなどとの共存・すみわけの検討も望まれる。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

ジュウイチ (カッコウ目・カッコウ科)

Hierococcyx hyperythrus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

もともと個体数が少なく、生息場所が限られており、繁殖環境の変化によって減少が懸念される。

形態

全長 32cm。姿形は小形のタカに似ている。背面は濃灰色の羽毛で覆われる。尾羽には褐色と黒の黄斑がある。胸から腹面にかけての羽毛は赤みを帯びる。

国内の分布状況

夏鳥として、九州以北に渡来。山地の林などに生息する。

県内の分布状況

県内では、有峰や牛岳、ブナオ峠など、低山帯上部から亜高山帯下部の深い樹林で繁殖する。主にコルリに托卵するので、コルリの生息地で観察されることが多いが、日本のカッコウ類の中では数が少ないため、生息場所は局地的である。渡りの途中とみられるものが、富山市呉羽山などのような平地で観察されることもある。

生態・生息環境

単独で生活し、林内や林縁でガ類の幼虫を採食する。托卵性で、主にコルリに托卵するが、オオルリ、ルリビタキ、コマドリなどの巣にも産卵し、育雛させる。夜間や飛行中にも鳴く。

生存への脅威（減少の要因）

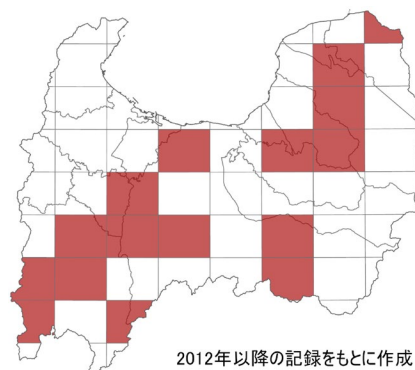
仮親となる小鳥類の減少により、繁殖環境が消失する。

保全対策

繁殖地の環境保全。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：藤島 光俊)

カッコウ (カッコウ目・カッコウ科)
Cuculus canorus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

オオヨシキリの繁殖するヨシ原でよく記録されていたが、近年、ヨシ原の衰退とともに、観察例が減ってきている。

形態

全長 35cm。頭部と体の上面は青灰色で、尾羽は灰黒色。腹部は白く、細い黒色横斑が帯状に並ぶ。

国内の分布状況

夏鳥として、九州以北に渡来。平地から山地の草原に生息する。

県内の分布状況

県内では、オオヨシキリが繁殖している神通川や常願寺川など、大きな河川のヨシ原周辺でよく観察される。また、富山市有峰や牛岳、南砺市桂湖周辺など、標高の高い森林帯にも生息している。一方、街中にも生息し、電線や民家のアンテナにとまって、鳴いていることがある。富山市城南公園で、巣立ったカッコウの幼鳥が、オナガに給餌される観察例もある。

生態・生息環境

単独で生活し、ガ類の幼虫を採食する。托卵性で、生息地によってオオヨシキリ、モズ、アオジ、オナガなど、いろいろな種類の鳥の巣に産卵し、育雛させる。

生存への脅威（減少の要因）

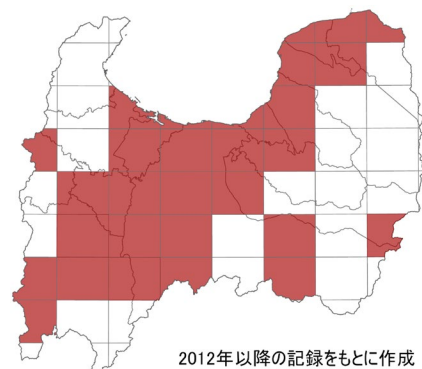
仮親となる小鳥類の生息環境の変化により、繁殖環境が消失する。

保全対策

仮親となる小鳥類の生息地、例えばオオヨシキリが繁殖しているヨシ原の確保。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：藤島 光俊)

バン (ツル目・クイナ科)
Gallinula chloropus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

繁殖ペア数が限られ、かつ、繁殖環境が不安定であり減少が懸念される。

形態

全長約 32cm。全身が黒く、上面は褐色みを帯びる。嘴の基部と額板は赤く、嘴の先端と足は黄色。

国内の分布状況

北海道から沖縄まで全国で生息・繁殖する。北日本の個体の多くは冬期に北陸・関東以南に渡り、越冬する。

県内の分布状況

ため池や湖沼、河川、水田、湿地などに生息する。特にヨシやガマなどの抽水植物が繁茂している場所を好む。繁殖期の生息地も同様だが、県内での繁殖期の分布は局地的である。冬期は越冬個体が渡ってくるため、個体数が増える。

生態・生息環境

雑食性であり、水辺の昆虫、小型の貝類、甲殻類、水生植物を食べる。営巣期は抽水植物のしげみの中で営巣する。ふ化したヒナはすぐに自力で移動・採餌を行う。一腹卵数約 5～8 卵、抱卵日数は約 21 日。

生存への脅威（減少の要因）

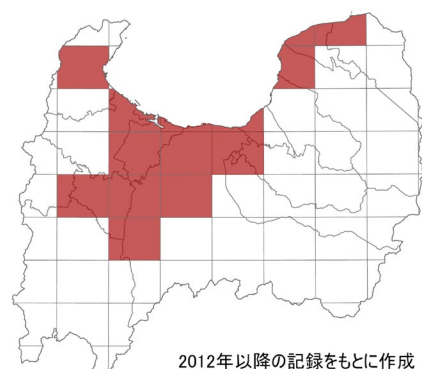
低標高地にある溜池や湿地が営巣地となっており、繁殖地としては不安定な環境である。

保全対策

繁殖地や採餌地の環境の保全。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

ケリ (チドリ目・チドリ科)
Vanellus cinereus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：情報不足

選定理由

生息個体数が限られており、繁殖環境が不安定であり減少が懸念される。

形態

全長約 36cm。背面は茶褐色で腹部は白色。頭部や胸は青灰色で、腹と胸との境は黒色。飛翔時は翼に白・黒・褐色の特徴ある斑がでる。嘴と足は黄色。

国内の分布状況

主に本州中部以北に夏鳥として飛来し、兵庫県周辺を南限として繁殖する。四国、九州にも冬期飛来する。いずれの地でも局地的な分布を示す。

県内の分布状況

滑川市、富山市、射水市の平野部で比較的多く記録されているが、その他の地域では少ない。冬期は温暖な地へ漂行するが、富山市北部地域では小群で越冬する。

生態・生息環境

水田や休耕田、荒地など平坦で開けた環境に生息する。草地や農耕地を歩行しながら昆虫や植物の種子などを採餌する。移動の時期には数羽から数十羽の群れで見られる。営巣期は特に警戒性が強く、巣に近づいた者には、舞い立ち「キリッ、キリッ」と大声を発しながら威嚇する。地上営巣で、雛は孵化後すぐに自力で移動し採餌する。1 腹卵数約 4 卵、抱卵日数 27～30 日。

生存への脅威（減少の要因）

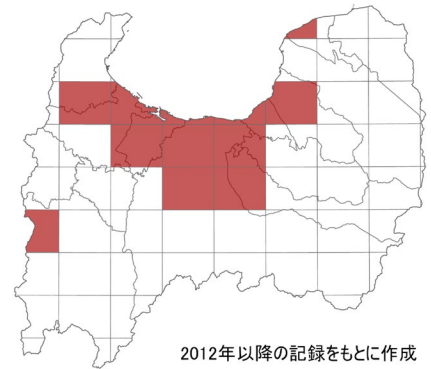
造成地や放棄田、遊休地、工場内敷地、水田の畦といった環境が営巣地となっており、繁殖地としては不安定な環境である。また農耕地での農薬の使用により、餌となる昆虫が減少している。

保全対策

繁殖地や採餌地の環境の保全。



撮影：木村 知晴



(文責：木村 知晴)

イカルチドリ (チドリ目・チドリ科)
Charadrius placidus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

1 級河川の河川改修が進み、繁殖環境が劣化し生息数が減少している。

形態

全長約 21cm。上面は淡褐色で下面は白色。頭部には白と黒の模様があり、細くて黄色いアイリングがある。胸には黒色の帯がある。足は淡黄色。

国内の分布状況

日本では全域で記録があり、本州から四国、九州で繁殖する。寒冷地の多くの個体は冬期、温暖な地域へ漂行する。

県内の分布状況

県内のほとんどの市町村で記録されている。繁殖期は主に大きな河川の中流から下流域で確認される。繁殖に適した河原や中州の減少により、繁殖個体数は減少している。

生態・生息環境

主に河川敷の広い河川の中流から下流域の河原や中州で繁殖する。昆虫など小動物を採餌する。孵化雛は幼綿羽が生えており、その日のうちに歩き、離巢する。1 腹卵数 3～4 卵、抱卵日数 27 日。

生存への脅威（減少の要因）

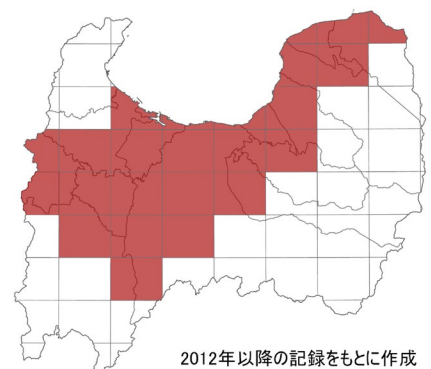
河川の整備により自然転石の礫が減るなど繁殖環境が劣化している。河原に釣り人や車やバイクなどが侵入する場所もあり繁殖障害が生じている。

保全対策

繁殖が攪乱される原因となる人や乗り物が出入りできないような中州が必要である。



撮影：高畑 晃



(文責：木村 知晴)

コチドリ (チドリ目・チドリ科)

Charadrius dubius

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

繁殖できる環境が不安定であり、繁殖個体数が減少している。

形態

全長約 16cm。イカルチドリに似るがやや小さい。体の上面は茶褐色で、下面は白色。頭部には白と黒の模様があり、黄色いアイリングはイカルチドリよりも目立つ。胸の黒い帯はイカルチドリよりも太い。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州に夏鳥として渡来・繁殖する。本州南部では一部越冬する。

県内の分布状況

県内に広く分布し、海岸部や平野部の河川、水田地帯などで観察されている。河川の中州や、整地された空き地、県東部の砂礫海岸で繁殖が確認されているが、繁殖個体数は減少している。

生態・生息環境

河川の中州や河原、整地された広い空き地などの礫地で、地上に浅い窪みを掘り産卵する。孵化雛は幼綿羽があり、離巢性で 25～27 日で独立する。採餌物は昆虫やクモなど。1 腹卵数 4 卵、抱卵日数 22～25 日。

生存への脅威（減少の要因）

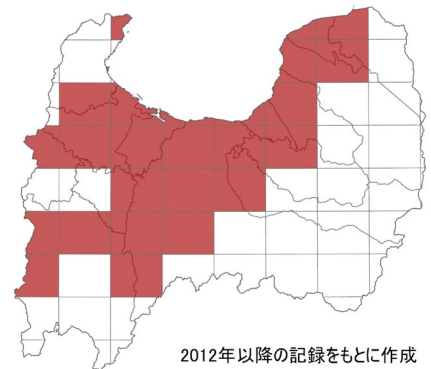
遊休地や荒れ地の整備、植生の遷移進行、河川敷内などの改変などで営巣環境の狭小化が懸念される。営巣地への車やバイクの乗り入れも繁殖に影響を与えている。

保全対策

営巣環境の砂礫地の保全。



撮影：木村 知晴



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

シロチドリ (チドリ目・チドリ科)

Charadrius alexandrinus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

海岸浸食による海浜の砂地の減少や海岸整備により、生息環境が劣化し繁殖個体数が減少している。

形態

全長約 18cm。体の上面は褐色で下面は白色。オスの夏羽は、前頭部と過眼線は黒色で頭頂から後頭部は茶褐色。メスとオス冬羽は過眼線が褐色で頭上は灰褐色。

国内の分布状況

北海道から九州まで分布・繁殖する。本州中部以南では、少数が越冬する。

県内の分布状況

富山湾に面した砂浜、河口などに生息する。広い砂浜海岸の後背地で繁殖するが、繁殖できる場所は限られている。少数は氷見市の海岸などで越冬する。

生態・生息環境

砂浜や埋立地に好んで生息する。巣は砂地の草や漂流物の間に浅い窪みを掘り作る。孵化雛は幼綿羽が生えており、自力で離巢し約 1 か月で独立する。繁殖後は群れで生活をする。ハマトビムシなどの甲殻類や小昆虫、クモなどを採餌する。1 腹卵数約 3 卵、抱卵日数 24～27 日。

生存への脅威（減少の要因）

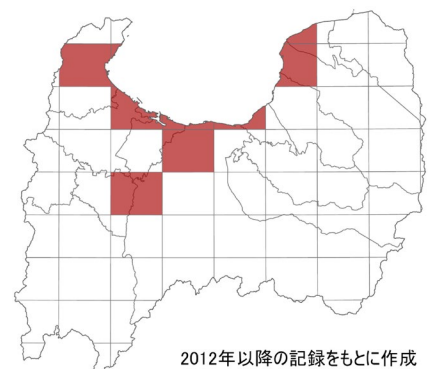
浜辺の散策人や釣り人の増加による繁殖攪乱や踏み潰し、雛を捕食する犬や猫などが繁殖を阻害している。また海岸浸食による砂浜の減少や、それを防ぐための護岸工事などで繁殖可能な環境が損なわれている。

保全対策

人間活動と生息環境の保全の調整。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

ヤマシギ (チドリ目・シギ科)
Scolopax rusticola

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年、確認例が減少しており、生息個体数の減少が懸念される。

形態

全長 34cm。頭頂から後頭に黒い黄斑があり、上面は赤褐色・黒・灰白色の複雑な斑紋がある。

国内の分布状況

北海道が主な繁殖地で、東北地方北部でも繁殖記録がある。東北地方南部から沖縄にかけて越冬し、林、芝地、畑などで生息する。

県内の分布状況

冬鳥として渡来するが、林の中の暗い場所に潜んでいることが多く、人目にふれにくいので観察例は多くない。富山市や黒部市などで観察されている記録が多い。また、渡りの時期や積雪が多い時には、市街地の公園でも観察されることもある。

生態・生息環境

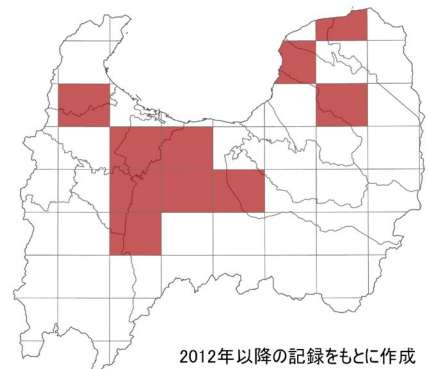
単独、またはペアで生活する。夕暮れから活動しはじめることが多いが、日中でも嘴を地面に差し込んで、ミミズや昆虫類の幼虫などを食べながら歩く。人が近づくと羽音を立てて飛びたち、木の間を巧みにぬって飛び去る。

生存への脅威（減少の要因）

山地の森林伐採により生息域が狭められている。

保全対策

生息している森林一帯の保全。



(文責：藤島 光俊)

アオシギ (チドリ目・シギ科)
Gallinago solitaria

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

観察記録が少なく、生息数の減少が懸念される。

形態

全長 30 cm。冬鳥。全体にはジシギ類特有の羽衣だが、背や翼は青灰色を帯びている。

国内の分布状況

日本では冬鳥として北海道から沖縄まで全国に渡来するが、数は多くない。溪流、山あいの河川、湿地、丘陵の沢などに生息する。

県内の分布状況

冬鳥として渡来し、山地の溪流や湧水地に生息するが多くない。単独でいることが多い。2012年以降の記録では、富山市（婦中町、八尾町など）の川沿いや、南砺市や朝日町では林道で観察されている。また、小矢部市宮島峡では、4月に渡り途中と思われる観察例もある。

生態・生息環境

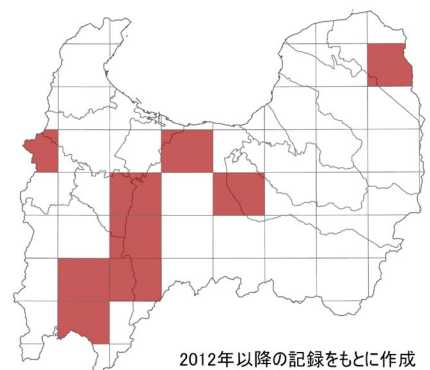
単独での渡来が多い。他のジシギ類は水田などの開けた場所に生息しているので、生息環境で本種と区別することができる。しばしば脚を伸縮させて、体を上下にゆする動作をする。

生存への脅威（減少の要因）

山地の森林伐採により、溪流を含めた生息域が狭められている。

保全対策

生息している森林・溪流の保全。



(文責：藤島 光俊)

イソシギ (チドリ目・シギ科)
Actitis hypoleucos

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

繁殖個体数が減少している。

形態

全長約 20cm。体は上面が灰黒褐色で、眉斑は白色。顔から胸にかけ褐色の縦斑がある。下面は白色で、白色部が胸の脇から翼のつけ根までくいこんでいる。足は黄褐色。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州に夏鳥として渡来し繁殖する。本州中部以南では越冬する個体もいる。

県内の分布状況

県内各地の水辺に生息するが、個体数は少ない。冬期には少数が越冬する。

生態・生息環境

河川や湖沼、海浜などに生息するが、生息個体数は限られる。尾を上下に振りながら水辺を歩き回り、小昆虫や水生昆虫などを採餌する。河川では、礫や砂のある河原の発達した中流域を好み繁殖している。巣は地上に浅い窪みを掘り枯れ葉などで皿状につくる。1 腹卵数 3~4 卵、抱卵日数 22~25 日。

生存への脅威（減少の要因）

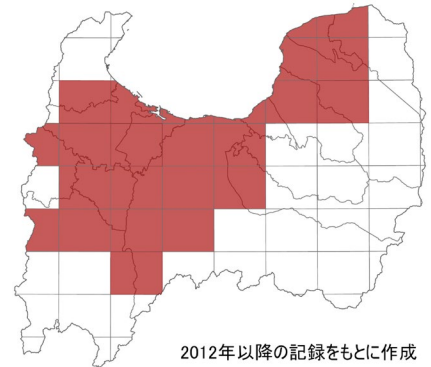
河川改修や河川敷内への人や車の乗り入れで、繁殖に影響が出ている。

保全対策

河川改修など環境変化にあたっては、生態系の保全に配慮した工法などの検討が望まれる。



撮影：木村 知晴



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

ミサゴ (タカ目・ミサゴ科)
Pandion haliaetus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

水界生態系の頂点に位置する特徴的な猛禽類である。繁殖ペアが多く生息する丘陵帯などの環境変化などでは生息数を大きく減らす可能性がある。

形態

全長約 54~64cm。翼開長 155~175cm。オスよりメスの方が大きい。翼は細長く、尾は短い。頭部は白く過眼線は黒色。体の下面や翼の下面は白っぽい。虹彩は黄色。趾指(あしゆび)は前後に 2 本ずつあり、趾の下側に針状のうろこをもつ。

国内の分布状況

全国の水辺に広く分布する。

県内の分布状況

海岸、大きな河川、湖沼などに分布する。丘陵帯から低山帯を中心に繁殖しているが、山岳奥地のダム湖周辺や河川敷での繁殖例もある。

生態・生息環境

主に魚食性のタカで、海岸、大きな河川、湖沼などの上空でホバリングをして獲物を見つけ、脚を大きく突き出し水に飛び込み捕獲する。営巣は、アカマツやスギなどの大木樹冠や沿岸部の岩上が中心であるが、鉄塔などの人工物にもすることがある。

1 腹卵数 2~3 卵、抱卵日数約 35~40 日、巣内育雛 50~60 日。

生存への脅威（減少の要因）

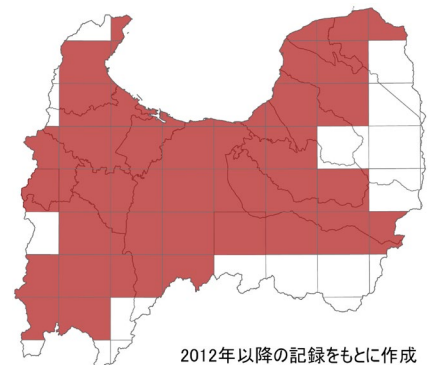
里山のアカマツの枯損や森林伐採、河川改修にともなう採餌場の消滅などが生息の圧迫要因となっている。また、海上で採餌し、獲物を持って営巣地まで大きく移動する本種にとって海上風力・陸上風力発電施設は、共に風車への衝突の危険性が高い。

保全対策

営巣木や採餌場の保全、食物連鎖を考えた水質汚濁の改善。風力発電施設の計画時には、事前に専門家と協議が必要。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：小澤 俊樹)

ハイロチュウヒ (タカ目・タカ科)

Circus cyaneus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息個体数が少ない。

形態

全長 51cm (メス)、45 cm (オス)。オス成鳥は頭からの上面は青灰色で虹彩は黄色い。雌雄、齢に関係なく腰が長方形に白い。

国内の分布状況

冬鳥として、ほぼ全国に埋立地、農耕地、荒れ地、アシ原、草原などに渡来するが多くなく、特にオス成鳥は少ない。

県内の分布状況

冬鳥として渡来し、農耕地、河口、アシ原などに生息する。2012 年以降では、富山市婦中町や、神通川、常願寺川、小矢部川などの河川敷及びその周辺での記録がある。タカの渡りの時期には、富山市牛岳周辺を渡っていく観察記録もある。メスや若鳥の記録が多く、オス成鳥の記録は少ない。積雪量が増えると、暖地に移動することが多い。

生態・生息環境

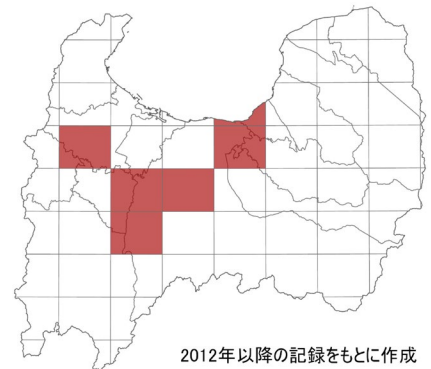
単独で行動し、特に朝夕は活発になる。水田の畔などを飛びまわり、鳥類を飛び立させて捕えたり、ネズミ類を捕ったりする。

生存への脅威（減少の要因）

湿地埋立てや草地開発により、生息環境が劣化している。

保全対策

湿地や草地など生息環境の保全。



(文責：藤島 光俊)

フクロウ (フクロウ目・フクロウ科)

Strix uralensis

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

営巣環境の悪化によって、個体数の減少が懸念される。

形態

全長 48～52cm。雌雄同色。翼は短くて幅が広い。羽角はない。羽衣の色は白っぽいものから黒っぽいものまでいる。

国内の分布状況

九州以北で留鳥。平地から山地の林、農耕地、草原などに生息する。大きな樹洞に営巣する。

県内の分布状況

留鳥として、平地から低山帯にかけての林に生息しており、県内のほとんどの市町村で記録されている。大木のある林を好むが、市街地に近い公園や社寺境内、河川敷にも生息していることがある。営巣に適した樹洞があるような大木は減少しており、特に針葉樹林が増加した山地での減少が懸念される。

生態・生息環境

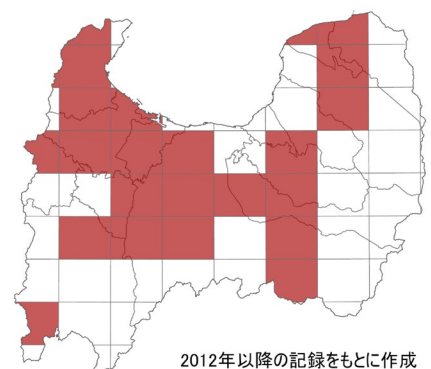
単独かつがいで生活する。日中は暗い林内や樹洞などで休息し、夕暮れから活動しはじめる。主にネズミ類を捕り、鳥類やカエルなども食べる。

生存への脅威（減少の要因）

樹洞があるような大木の伐採。カメラマンなど人の林内への立ち入りによる営巣攪乱。

保全対策

繁殖している森林環境の保全。



(文責：藤島 光俊)

アカショウビン (ブッポウソウ目・カワセミ科)
Halcyon coromanda

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

定理由

溪畔のよく発達した森林に繁殖するが、生息個体数は少ない。

形態

全長約 28cm。全体ほぼ赤褐色の鳥。嘴は巨大で足と共に赤色。腰に水色の羽毛がある。虹彩は暗褐色。足趾は合趾足(ごうしそく)。

国内の分布状況

夏鳥として北海道から南西諸島まで広く渡来し繁殖する。

県内の分布状況

低山から中山間地の水辺の広葉樹林帯で繁殖する。渡りの時期には、平地や丘陵でも見かける。

生態・生息環境

庄川や小矢部川上流の溪流・細流のあるよく生育した広葉樹林や県内山間地の森林に囲まれた溪流・溜池・池沼のある環境などに生息する。早朝や夕方に囀るが、曇天や雨天には日中も鳴く。採餌物はカエル、カタツムリ、サンショウウオ、小魚、オタマジャクシのほか昆虫など。巣は樹洞・崖の洞のほかキロスズメバチの古巣や朽ち木・土壁などに自分で掘る。1 腹卵数 5～6 卵、抱卵日数約 21 日、巣内育雛約 17 日。

生存への脅威(減少の要因)

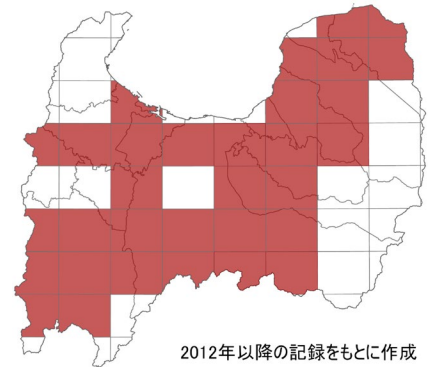
山間地のスギの植林による林種転換で、生息環境が狭小化している。

保全対策

溪畔、湖畔などの生物多様性の高い森林の保全。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：高橋 輝男)

サンコウチョウ (スズメ目・カササギヒタキ科)
Terpsiphone atrocaudata

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年やや回復傾向にあるが、繁殖個体数が一時、全国的に減少していた。

形態

全長約 17.5cm (メス)、約 44.5cm (オス)。頭上に冠羽があり、アイリングと嘴はコバルトブルー。オスの尾は顕著に長い。頭上から頸、胸までと尾羽は紫黒色、背面は紫褐色。メスの背面は茶褐色。雌雄とも腹面は白色。

国内の分布状況

本州、四国、九州に夏鳥として渡来し繁殖する。繁殖個体数が減少していたが、近年やや回復傾向にある。

県内の分布状況

山麓から山地帯に分布する。1960 年代までは、氷見市や朝日町の山麓などでよく観察されたが、その後減少し分布は局地化していたが、近年は全県的に増えてきている。

生態・生息環境

溪流の付近のよく茂ったスギ林とホウノキのような広葉樹の混ざったやや暗い混交林を好む。飛翔性の昆虫をフライングキャッチして捕食する。営巣は細い枝の上にクモの巣を使用し、スギ皮やコケ類をとめカップ状の巣を作る。産卵期 5～7 月、1 腹卵数 3～5 卵、抱卵日数 12～14 日、巣内育雛 10～12 日。

生存への脅威(減少の要因)

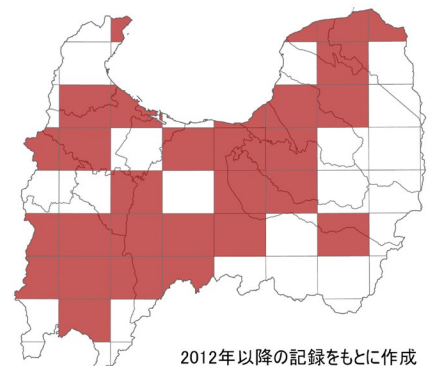
繁殖地の森林伐採のほか越冬地における森林(生息環境)の改変などが危惧される。

保全対策

放置されたスギ造林地の適正な管理、隣接の落葉広葉樹の保全。溪畔の昆虫多様性の確保。



撮影：高畑 晃



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：間宮 寿頼)

コヨシキリ (スズメ目・ヨシキリ科)
Acrocephalus bistrigiceps

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息できる環境が不安定であり、近年の繁殖情報も少ない。

形態

全長約 14cm。上面は黄褐色、下面は黄白色での上の黒い線が目立つ。

国内の分布状況

夏鳥として渡来し、主に本州中部以北で繁殖する。北海道では低地の草原で繁殖するが、本州では主に標高の高い草原で繁殖する。

県内の分布状況

主に春と秋の渡りの時期に河川や湿地などで見られる。秋には稲刈り前の水田でも見られることがある。過去には射水市(旧新湊市)などで繁殖した記録があるが、近年、繁殖期に囀りが聞かれているものの、繁殖状況は不明である。

生態・生息環境

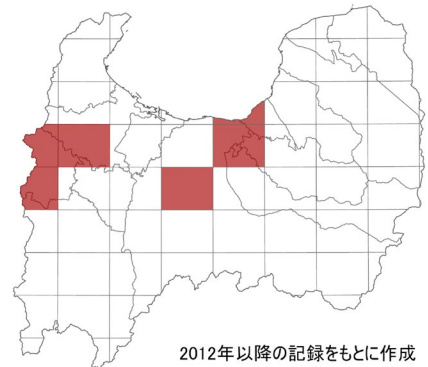
水辺のヨシ原や、やや乾燥した草原にも生息し、オオヨシキリよりも遅れて繁殖に入ることが多い。オスは草の上部に止まって特徴あるさえずり方でさかんにさえずるが、さえずっていないときは、草の茂みの中を落ち着きなく移動しながら採餌しており、姿を見ることが少ない。

生存への脅威(減少の要因)

河川整備における改変、植生の遷移進行などで、営巣・生息環境が減少している。

保全対策

草地環境の保全。



(文責：高畑 晃)

ホオアカ (スズメ目・ホオジロ科)
Emberiza fucata

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息環境の改変が行われやすく、繁殖個体群も少ない。

形態

全長約 16cm。オスは頭上から後頭が灰色。胸に黒と褐色の 2 本の横帯がある。頬は赤褐色。

国内の分布状況

九州以北で留鳥または漂鳥。

県内の分布状況

夏鳥として平地の河川、牧場周辺に渡来し、局地的に繁殖するが、少数は冬季にも観察される。県東部を中心に情報がある。河川の堤防の草刈りが一定の間隔で繰り返されるため、繁殖障害となっている。

生態・生息環境

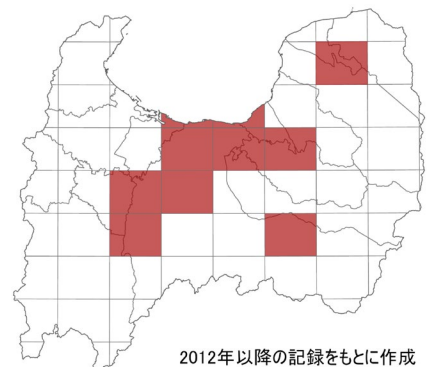
県内の低木や葦のまばらな堤防敷、草原、スキー場などに少数が生息する。草の種子や昆虫の成虫・幼虫を採餌する。草丈のやや低い乾いた場所の草むらや葦の枝に営巣する。産卵期 5~6 月、1 腹卵数 3~6 卵、抱卵日数約 14 日、巣内育雛約 10 日。

生存への脅威(減少の要因)

河川改修による環境変化により、繁殖環境が消失する。繁殖期の堤防の草刈りは、直接的な繁殖障害となっている。

保全対策

繁殖地の草地の保全。



(文責：間宮 寿頼)

オシドリ (カモ目・カモ科)
Aix galericulata

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：情報不足

選定理由

冬期越冬個体数は多いが、県内での繁殖ペア数や繁殖場所について不明な点が多い。

形態

全長約 45cm。繁殖期のオスは極彩色で、三列風切の最内羽は銀杏の葉形で橙色。メスと非繁殖期のオスは全体が灰褐色。

国内の分布状況

中部地方以北で繁殖し、本州以南で越冬する。北海道では夏鳥である。

県内の分布状況

繁殖期は溪流やダム湖など、標高の高い水辺に生息する。越冬期や渡りの時期は河川の下流域や平野部の湖沼、海辺でも見られる。

生態・生息環境

河川や湖沼に生息する。冬期は群れで見られるが、それ以外は単独またはつがいで行動することが多い。水辺の森林で樹洞内に営巣し、一腹卵数は 7～10 個、抱卵日数は 27～30 日。雛は孵化後すぐに自力で歩行・採食する。水辺でドングリや様々な植物・昆虫などの小動物を採餌する。

生存への脅威（減少の要因）

繁殖に適した水辺の森林や、樹洞を持つ大木の減少が懸念される。

保全対策

繁殖環境の保全。

(文責：高橋 輝男)

ウズラ (キジ目・キジ科)
Coturnix japonica

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

近年確認記録はなく、生息状況は不明である。

形態

全長約 20cm。丸い体つき、尾は短い。体の上面は、褐色で黒と淡黄色の横斑と縦斑がある。眉斑は黄白色。オスは頭部に赤褐色の羽を有する。

国内の分布状況

夏鳥として、北海道・本州中部以北で繁殖し、西南日本では越冬する。近年は、全国的に減少している。本種は狩猟鳥であったが、個体数の著しい減少に伴い 2014 年に除外された。

県内の分布状況

冬季に河川敷や海浜の草地や湿地で記録がある。1950 年代には、繁殖期に庄川河川敷でさえずりが記録されている。近年県内で確認記録はないが、要因の 1 つとして冬季の積雪量の減少に伴い、本種の越冬環境となる水田や草地の枯れ草が露出する面積が増え、観察が難しくなった可能性が考えられる。家禽としても馴染みの深い鳥であるため、確認した場合は籠脱け個体の可能性を留意し、確認場所の環境や羽の摩耗状況をしっかり観察することが望ましい。

生態・生息環境

農耕地や河川敷などの草地で生活する。地上を歩きながら、草本の種子や小昆虫を採餌する。雛は幼綿羽に覆われ、孵化間もなく離巢する。1 腹卵数 5～12 卵、抱卵日数 16～21 日。

生存への脅威（減少の要因）

開発、圃場整備などに伴う河川敷などの草地や湿地、農耕地の減少。家禽との交配。

保全対策

草地や農耕地の維持管理。飼いウズラの籠脱けの防除。

(文責：中田 達哉)

クイナ (ツル目・クイナ科)
Rallus indicus

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息個体数が減少していると推測されるが、確認情報が不足している。

形態

全長約 29cm。上面は褐色で黒い縦斑がある。顔から胸は青灰色で、腹と脇は白と黒の横縞模様がある。上嘴は黒褐色、下嘴は赤色。足は薄紅色。

国内の分布状況

北海道と本州北部では夏鳥、本州南部から南西諸島では冬鳥。

県内の分布状況

2012 年以降では、富山市、高岡市、黒部市でのみ確認されている。確認情報が少なく、個体数は非常に少ないと考えられるが、詳しい生息状況は不明である。県内での繁殖は確認されていない。

生態・生息環境

平地のヨシやマコモが生育する池沼や河川、水田脇の茂った草むらなどに生息する。首を前に伸ばし尾羽をたえずはね上げながら歩行する。警戒心が強く、開けた場所にはあまり出てこない。採餌物は小昆虫、クモ、カエル、甲殻類、植物の種子など。1 腹卵数 6～7 卵、抱卵日数 19～22 日、雛は早成性で孵化後間もなく離巢する。

生存への脅威（減少の要因）

湿地の埋立てや圃場整備、護岸工事、河川改修、大規模な太陽光発電パネルの設置などによりヨシ原や草むらが急速に減少している。

保全対策

ヨシ原や草むらなど生息環境の保全。

(文責：木村 知晴)

セイタカシギ (チドリ目・セイタカシギ科)
Himantopus himantopus

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

環境省のレッドデータブック(2020)掲載種で、県内通過記録が少ない種である。

形態

全長約 37cm。非常に長い足と細い嘴をもつ。背面が黒く、下面は白色。足と虹彩は赤色。

国内の分布状況

主に旅鳥として各地の干潟、河口、水田、湿地などに渡来する。西日本から関東で局地的な繁殖記録があり、東京湾や伊勢・三河湾などで定着している。

県内の分布状況

観察されない年もあるが、年に 1～数回、富山市や射水市、滑川市、入善町など、湿地や水田、河口に単独または数羽の群れで飛来し、数日間滞在する。4 月～11 月の観察例があるが、春先の水田の代掻きシーズンに飛来することが多い。

生態・生息環境

かつて稀な渡り鳥であったが、現在は国内の留鳥の地域もある。1 腹卵数通常 4、放卵日数 22～25 日、巣立ち雛の世話 は 28～32 日。

生存への脅威（減少の要因）

湿地や干潟などの生息環境の消失や乾田化、遊休地の運用による環境変化。

保全対策

本県には干潟のような環境はないが、渡来地となっている湿地や河川敷の存在は、保全対策として重要である。

(文責：和田 浩一)

ハウロクシギ (チドリ目・シギ科)
Numenius madagascariensis

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内において確認されるのは年に数例で、観察記録のない年もある。

形態

全長約 62cm。長くて下に曲がった嘴をもつ大型のシギ。

国内の分布状況

渡りの途中、春や秋に日本全国に立ち寄る旅鳥。

県内の分布状況

春や秋の渡りの季節に、氷見市、高岡市、射水市、滑川市など海岸で観察されている。単独もしくは数羽でいることが多い。「コーリュー」と鳴きながら飛び、海岸沿いを通過していくこともある。

生態・生息環境

海岸や湖岸などにおいて、嘴を砂や泥の中に差し込んで探るようにして、小型水性無脊椎動物を食べる。

生存への脅威（減少の要因）

立ち寄る砂浜が減少している。

保全対策

砂浜の保全や、マリンレジャーによる人の立ち入りからの保全が求められる。

(文責：高畑 晃)

オオソリハシシギ (チドリ目・シギ科)
Limosa lapponica

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

環境省のレッドデータブック(2020)掲載種で、県内通過記録が少ない種であり、追加の検討を必要とする。

形態

全長約 41cm。長い嘴が少し上に反り、足は比較的短い大形のシギ。

国内の分布状況

旅鳥として、全国の干潟や入り江などに渡来するが、一般的には春の方が多い。

県内の分布状況

射水市や富山市の海岸、及び海岸近くの水田に渡来する。春の渡りの時期に記録されることが多い。

生態・生息環境

単独、またはチュウシャクシギなど他のシギの群れと一緒に行動し、砂浜や水田で採餌する。

生存への脅威（減少の要因）

砂浜の衰退と水田の乾田化、用水路や圃場整備などで生息環境が減少している。

保全対策

砂浜の保全、マリンレジャーなどの立ち入り規制が必要である。

(文責：高畑 晃)

オオジシギ (チドリ目・シギ科)
Gallinago hardwickii

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

環境省のレッドデータブック(2020)掲載種で、県内通過記録が少ない種であり、追加の検討を必要とする。

形態

全長約 30cm。タシギよりやや大型で淡色。8cm 近くの長い嘴をもつ。尾羽は 16～18 枚が多い。

国内の分布状況

夏鳥として渡来し、北海道や東北地方では平地、本州中部では、海辺に近い牧草地や埋立地、高原に生息する。国内では、北海道、本州および九州の一部で繁殖する。

県内の分布状況

1970 年代には、繁殖期のオスが行うディスプレイフライトが富山市内の海岸部で観察され、繁殖が予測されたが、その後の繁殖情報は無い。この 12 年間で観察記録のない年もあるが、渡りの時期に、富山市などの平野部の水田で見られる。

生態・生息環境

水田や河川敷の砂泥地、草原、ササ原、牧草地、畑などで見られる。採餌物は昆虫の幼虫やミミズなど。1 腹卵数 4 卵。

生存への脅威（減少の要因）

県内では湿地埋立てや草地開発、乾田化事業により生息環境が劣化している。

保全対策

湿地や草地など生息環境の保全。

(文責：和田 浩一)

タカブシギ (チドリ目・シギ科)
Tringa glareola

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

毎年、春や夏に水田で確認されているが、渡来する個体数が減少していると推測される。

形態

全長約 21cm。体の上面は灰褐色で小さい白斑があり、首から胸にかけても縦斑が多数ある。腰は白く、嘴は黒で、足は黄緑色。

国内の分布状況

春と秋に通過する旅鳥。

県内の分布状況

春や秋の渡りの季節に、射水市や富山市、上市町などで、単独か数羽が確認されることが多い。春は田植えが終わった後の水田、秋は作付けをしていない草が生えた水田などで見られる。

生態・生息環境

海岸にはあまり生息せず、内陸の水田や池沼、湿地などで水生昆虫やミミズなどを採る。警戒心は比較的強く、外敵が近づくと、「ピッピッピッ」と鳴いて飛び立つことが多い。

生存への脅威（減少の要因）

水田の乾田化、用水路や圃場整備などで生息環境が減少している。

保全対策

生息に適した水辺環境の保全。

(文責：高畑 晃)

ツルシギ (チドリ目・シギ科)
Tringa erythropus

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内において確認されるのは年に数例で、観察記録のない年もある。

形態

全長約 32cm。夏羽は全身黒色で、背に小さい白斑がある。嘴は黒だが、下嘴の基部は赤で、足は赤黒い。冬羽では上面が灰褐色になる。

国内の分布状況

旅鳥として春秋に通過する。春の渡来は早く、2月には内陸の水田などで見られる地方がある。春に比べて秋は数が少ない。

県内の分布状況

2012年以降、県内では富山市と黒部市で数例確認されているのみであり、近年の渡来数はかなり少ないと推測される。

生態・生息環境

水田や沼などの内陸を好み、昆虫やミミズ、小魚などを採る。

生存への脅威（減少の要因）

水田の乾田化、圃場整備や用水路のコンクリート化などにより、生息環境が減少している。

保全対策

湿地や草原の保全、農業従事者の理解と協力。

(文責: 高畑 晃)

ズグロカモメ (チドリ目・カモメ科)
Saundersilarus saundersi

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

全国的に海辺の湿地や干潟の整備が進行しており、今後も生息環境の減少が予測される。

形態

全長約 32cm、ユリカモメより一回り小型で、嘴は黒色。夏羽は頭部が黒色となる。

国内の分布状況

冬鳥として関東地方以西の干潟や河口に渡来する。有明海や八代海、周防灘の干潟が日本の重要な越冬地となっている。

県内の分布状況

冬季～春季に黒部市、富山市、射水市、滑川市などの海岸や近くの水田などで、少数が散発的に記録されている。

生態・生息環境

中国の黄海沿岸で繁殖。日本では主に九州から沖縄の干潟で越冬する。カニやゴカイ、ミミズなどを採餌する。

生存への脅威（減少の要因）

干潟など湿地の埋め立ては重大な危機。繁殖地である中国の干潟の開発。

保全対策

湿地や干潟の保全。中国での重要な繁殖地は自然保護区となっている。

特記事項

移動性野生動物種の保全に関する条約（ボン条約）付属書Ⅰ記載種。

(文責: 和田 浩一)

アジサシ (チドリ目・カモメ科)
Sterna hirundo

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 該当なし

選定理由

日本で数少ない繁殖例があるが、情報が不足している。

形態

全長約 35.5cm。背面は灰色、腹面と尾は白色。嘴と足は黒色（稀に足の赤い別亜種のアカシアジサシ *S.h.minussensis* がいる）。夏羽は頭上が黒色、冬羽は額が白色。

国内の分布状況

大陸の中緯度地域で繁殖し、旅鳥として渡りの時期に、全国の海辺、干潟、河口に群れで渡来する。まれに越夏し、黒部川河口、群馬県、東京湾での繁殖例がある。

県内の分布状況

観察記録のない年もあるが、1年に1～数回、渡りの時期に、海岸、河口、河川敷などで少数が観察される。黒部川河口ではコアジサシに混じり、1993年に繁殖が確認された。2001年7月にも幼鳥1羽への給餌活動が観察されたが、その後の繁殖情報はない。

生態・生息環境

海浜や大きな河川、海に近い水田などに現れる。数メートルの高さからホバリングを繰り返し、水中の小魚などをダイビングして採餌する。巣は河口の地上につくる。1腹卵数1～3卵、抱卵日数21～22日。

生存への脅威（減少の要因）

カラスやトビ、犬猫、四輪駆動車、釣り人、散策する人などの侵入により繁殖環境が攪乱されている。

保全対策

自然に堆積した砂礫中州の保全。人の立入規制。

(文責: 和田 浩一)

ウミガラス (チドリ目・ウミスズメ科)
Uria aalge

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧 IA 類

選定理由

環境省のレッドデータブック(2020)掲載種であるが、近年県内での観察例はない。

形態

全長約 44cm。ウミスズメの仲間の大型種。嘴と頸は長い。上面は黒褐色、下面は白い。冬羽には、目の後方に 1 本の黒線が走る。

国内の分布状況

北太平洋と北大西洋で繁殖し、国内では北海道の天売島で少数が繁殖する。冬鳥として主に本州中部以北の沿岸で見られる。

県内の分布状況

1970 年代頃までは富山湾内で観察できたが、この 12 年間、県内の観察記録はない。

生態・生息環境

潜水性の海鳥。海上を浮遊しながら潜水し、魚類などを採餌する。潜水時間は 30 秒を超すこともある。鳴き声から「オロン鳥」と呼ばれていた。

生存への脅威(減少の要因)

刺し網やはえ縄漁による混獲や重油流出、レジンベレットなど海洋汚染が指摘される。

保全対策

魚類との混獲や海洋汚染への一層の対策が必要である。

特記事項

国内希少野生動植物種。天売島はウミガラスなど海鳥繁殖地として北太平洋西岸の繁殖南限に位置し、国指定天然記念物。

(文責: 和田 浩一)

マダラウミスズメ (チドリ目・ウミスズメ科)
Brachyramphus perdix

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 情報不足

選定理由

近年、減少しているが、生息情報が不十分である。

形態

全長約 25cm。嘴が黒く比較的長い。上面は黒褐色、下面は白色。夏羽は下面に褐色の鱗状模様がある。

国内の分布状況

主に本州中部の沿岸以北の海上に冬鳥として渡来する。オホーツク海沿岸、カムチャッカ半島、アリューシャン列島などで繁殖する。少数が北海道知床および北方領土で繁殖している可能性はあるが不明。

県内の分布状況

1960 年代～1980 年代に富山湾沿岸での観察例があったが、この 12 年間、観察記録はない。

生態・生息環境

沿岸性の海鳥で、単独か番で生活することが多く、甲殻類や小魚などを採餌する。

生存への脅威(減少の要因)

刺し網やはえ縄漁による混獲や重油流出、レジンベレットなど海洋汚染、繁殖地の開発が指摘される。

保全対策

魚類との混獲や海洋汚染への一層の対策が必要である。

(文責: 和田 浩一)

ウミスズメ (チドリ目・ウミスズメ科)
Synthliboramphus antiquus

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧 IA 類

選定理由

環境省のレッドデータブック(2020)掲載種であり、近年、減少しているが、生息情報が不十分である。追加の検討を必要とする。

形態

全長約 26cm。嘴は短く黄白色。体の上面は灰黒色、下面は白色。夏羽では目の上から後頭に白色飾り羽がある。

国内の分布状況

北海道の天売島などで少数が繁殖し、冬は全国の沿岸に渡来する。

県内の分布状況

冬鳥として富山湾に渡来するが、個体数は少ない。1960 年代までは、沿岸で普通に見られていたが、それ以降は漸減した。近年では、散発的に入善町、黒部市、魚津市、富山市、氷見市などの漁港、河口、海上で観察される。

生態・生息環境

小群で生活し、潜水しながら甲殻類や小型の魚類などを採餌する。

生存への脅威(減少の要因)

刺し網やはえ縄漁による混獲、重油流出、レジンベレットなど海洋汚染が指摘される。

保全対策

魚類との混獲や海洋汚染への一層の対策が必要である。

(文責: 和田 浩一)

カンムリウミスズメ (チドリ目・ウミスズメ科)
Synthliboramphus wumizusume

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

環境省のレッドデータブック(2020)に掲載されている。かつて少数観察されたことがあった。近年の観察例がなく、生息情報が不十分である。

形態

全長約 24cm。体の上面は灰黒色、下面は白色。夏羽頭上には冠羽がある。嘴は青黒色。

国内の分布状況

韓国南部の離島と本州中部以南の岩礁や離島で繁殖する。富山湾に近い輪島市七ツ島の主に荒三子島で繁殖している。非繁殖期には、北海道から九州の海域に出現する。

県内の分布状況

かつて、富山湾や小矢部川での数回の観察記録があったが、この 12 年間、観察記録はない。

生態・生息環境

海上を泳いだり海中に潜ったりして、オキアミなど甲殻類や小魚などを採餌する。巣は 3 月～4 月に岩の割れ目、隙間、草の根元などの地上に作る。

生存への脅威(減少の要因)

生息域での刺し網などによる混獲や重油流出、レジンベレットなど海洋汚染による支障が危惧される。繁殖地では釣り人やネズミなどの被害問題がある。

保全対策

繁殖地の保全対策と共に、混獲や海洋汚染への一層の対策が必要である。

特記事項

国指定天然記念物。

(文責: 和田 浩一)

ヘラサギ (ペリカン目・トキ科)
Platalea leucorodia

富山県 2025 カテゴリー: 情報不足
環境省 2020 カテゴリー: 情報不足

選定理由

近年、冬鳥及び旅鳥として渡来するようになってきているが、生息情報が不十分である。

形態

全長約 86cm。先が平たい杓文字状の黒色の嘴をもつ。嘴の基部から目につながる線状の黒い裸出部がある。成鳥では、後頭にオレンジ色の冠羽が長く伸びる。

国内の分布状況

日本では繁殖せず、冬鳥または旅鳥として渡来する。

県内の分布状況

2012 年以降では富山市や入善町の河口付近で確認されている。2023 年 12 月、富山市常願寺川に渡来した個体は 1 か月近く滞在した。

生態・生息環境

沼沢地やヨシ原、水田、干潟などを生息地とする。比較的浅い水辺で、長い嘴を垂直に立て、首を左右に動かしながら餌を採る。県内では、常願寺川や黒部川などの河川や河口部、及びその近くの水田で記録されることがある。

生存への脅威(減少の要因)

湿地の埋立てや河川環境の変化により、生息環境が狭まってきている。

保全対策

安息な生息空間の維持、生息環境の保全。

(文責: 高畑 晃)

クロツラヘラサギ (ペリカン目・トキ科)
Platalea minor

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IB 類

選定理由

世界で中国・沿海州・朝鮮半島などに分布する生息数 500 羽程度の数少ない種である。1987 年以降、県内に旅鳥として渡来していたが、近年の生息情報が不十分である。

形態

全長約 74cm。先が平たい杓文字状の黒色の嘴をもつ。目先も幅広く黒い皮膚が裸出し、足も黒色。

国内の分布状況

稀な旅鳥として干潟や湿地などの水辺に生息する。10～15 羽ほどが越冬するが九州地方に多い。

県内の分布状況

単独のことが多く、短期間の滞在で姿を消す。春（4～6 月）の記録が多いが、8 月や 11 月の飛来もある。

生態・生息環境

常願寺川や神通川、小矢部川などの河川や河口部、埋立地などの水辺で記録されることが多い。飛翔姿はサギ類と異なり長い頸を伸ばして飛ぶ。採餌物は水生昆虫や小魚などの生物で、頭を左右に振りながら歩きまわり、水中の嘴に感触のあったものを捕える。

生存への脅威（減少の要因）

湿地の埋立てや河川環境の変化により、生息環境が狭まってきている。

保全対策

安息な生息空間の維持、生息環境の保全。

（文責：高畑 晃）

オオアカゲラ (キツキ目・キツキ科)
Dendrocopos leucotos

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息数が少なく、繁殖状況の調査が必要である。

形態

全長 28cm。雌雄ほぼ同色。オスの頭頂部は赤く、メスに赤い部分はない。雌雄に関係なく体下面に縦斑がある。アカゲラは小さく、肩羽に大きな白斑がある。

国内の分布状況

留鳥。北海道から九州までの広葉樹林や針広混交林に生息している。

県内の分布状況

留鳥として、主に落葉広葉樹林や針広混交林に生息し、枯れ木の多い自然林を好む。南砺市や砺波市、富山市山田地区、立山町での観察例が多いが、アカゲラより生息数が少ない。低地で観察されることは稀である。

生態・生息環境

単独かつがいで、広葉樹林を好んで生活する。一般習性はアカゲラに似ている。昆虫類やその幼虫を捕り、秋から冬には木の実もよく食べる。

生存への脅威（減少の要因）

繁殖地における、樹洞があるような大木の伐採や自然林の衰退。

保全対策

繁殖している森林一帯の保全。

（文責：藤島 光俊）

ヤイロチョウ (スズメ目・ヤイロチョウ科)
Pitta nympha

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IB 類

選定理由

近年渡来記録が散見されるが、生息状況の把握は不十分である。

形態

全長 18cm。丸みを帯びた体形で尾は短い。頭は茶色で頭央線と過眼線は黒色。翼に光沢のある緑色や青色、腹の中央部は赤色で非常に美しい鳥。

国内の分布状況

夏鳥として 5 月頃に、主に本州中部から九州にかけて飛来する。県内では主に 6 月から 7 月の記録がある。生息環境は主に常緑広葉樹林などで観察される。

県内の分布状況

砺波市、富山市(婦中町)で数回の記録があるほか、高岡市(福岡町)で確認されている。いずれも特徴ある声や姿が確認され、数日で飛去している。過去には富山市(旧大沢野町)で確認されているほか、秋季に県東部で死体が確認されたことがある。

生態・生息環境

低山帯の常緑広葉樹林などに生息し、広い縄張りをもつ。落葉下のクモ、小昆虫、ミミズなどを採餌する。営巣場所は木の根元や木の上。枝上や倒木の上で「ホーヘン、ホーヘン」とよく通る声でさえずる。1 腹卵数は 4~6 卵、放卵日数 14~16 日、巢内育雛 14~16 日。

生存への脅威(減少の要因)

繁殖地での伐採。特に里山整備事業などの影響を受ける可能性があるため、飛来地などでの大規模な伐採は注意が必要である、その他、カメラマンなど人の林内への立ち入りによる営巣攪乱。

保全対策

繁殖している森林一帯の保全。

特記事項

国内希少野生動植物種。

(文責：間宮 寿頼)

ツリスガラ (スズメ目・ツリスガラ科)
Remiz consobrinus

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年の記録がなく、生息情報が不足している。

形態

全長 11cm。オスの頭頂部は灰色で過眼線は黒く、メスの頭頂部や過眼線は褐色。嘴は小さく尖る。

国内の分布状況

冬鳥として主に西南日本に渡来、越冬する。

県内の分布状況

海岸近くの埋立地や神通川河畔、黒部市立野などのヨシ原に渡来していた。1988 年に射水市(旧新湊市)で初確認されて以降、2008 年までは観察例があったが、2012 年以降の記録はない。

生態・生息環境

ヨシやスキの草原で茎を小群で伝いながら葉鞘(ようしょう)を剥がして、小昆虫やクモ、種子を採餌する。地鳴きは「ツイー」「チー」とメジロに似る。

生存への脅威(減少の要因)

生息状況の詳細が不明なので、情報収集が必要である。

保全対策

ヨシやガマなどの高茎植生の保全。

(文責：藤島 光俊)

コシアカツバメ (スズメ目・ツバメ科)
Cecropis daurica

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

近年、生息数が減少している。

形態

全長約 19 cm。ツバメよりやや大きい。淡いパフ白色の下面に黒褐色の細い縦斑が密にある。腰は橙色(幼鳥の腰は白色)。

国内の分布状況

夏鳥として北海道以南に飛来する。全国的に減少傾向にあるとされる。

県内の分布状況

コンクリート製の構造物に営巣する。県東部から県西部に見られるが、近年、飛来数も少なく、外敵による繁殖に失敗する例が多い。山間地のコンクリートの建造物にも集団で繁殖していたことがある。ツバメより遅れて飛来する。

生態・生息環境

都市型のツバメで、木造家屋には営巣せず、コンクリートの壁面に入口のある徳利を半分にした形状の巣を取り付ける。1 腹卵数 4～6 卵、巣内育雛 28～31 日。

生存への脅威(減少の要因)

スズメが格好な営巣場所として乗っ取ることが多い。毎年、同じ場所で繰り返すので、地域的には繁殖に重大な影響を受けることになる。また、カラスが飛来し雛を採餌することもこの鳥の学習能力を考えると脅威となっている。

保全対策

スズメの営巣対策とカラスの飛来対策の工夫。

(文責：間宮 寿頼)

キバシリ (スズメ目・キバシリ科)
Certhia familiaris

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

繁殖個体群は少なく、生息情報が不十分である。

形態

全長 13.5cm。上面は茶褐色で白い縦斑がある。眉斑と下面は白色。尾は褐色でやや長く、羽先は尖りくさび形。嘴は細く下湾している。

国内の分布状況

九州以北の山地の針葉樹林で留鳥。北海道では低地の林にもいる。最近の調査報告では低標高地でも確認されており、分布拡大傾向にある。

県内の分布状況

留鳥として、山地から亜高山帯の針葉樹林に生息する。近年、観察記録は増えている傾向にあるが、個体数は少ない。朝日町、魚津市、立山町、富山市、砺波市、南砺市などで観察されている。

生態・生息環境

雌雄同色。大径木が多く生育し、山地を好む。樹幹の下から上へと食べ物を探しながら、ジグザグや螺旋(ら)線(せん)を描いて登り、隠れている虫などを採餌する。巣は樹洞や幹の裂け目などを利用する。

生存への脅威(減少の要因)

山地の森林伐採により生息域が狭められている。

保全対策

生息地の森林の保全。

(文責：藤島 光俊)

コジュリン (スズメ目・ホオジロ科)
Emberiza yessoensis

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

繁殖や越冬記録のある希少な鳥。情報収集が必要である。

形態

全長 14.5cm。オス夏羽は頭部が黒い。メス夏羽と冬羽の雌雄は似ている。

国内の分布状況

本州と九州の一部で局地的に繁殖する。冬期は本州などの河川敷や沿岸地帯で生活する。

県内の分布状況

海辺に近い埋立地や河川の下流域に生息するが、個体数は少ない。2012 年以降では、氷見市十二町で記録があるのみである。

生態・生息環境

丈の比較的低い草地で繁殖し、射水市(旧新湊市)では 1988 年に繁殖行動が観察されている。草の間の地上で小昆虫やクモ、草の種子を採餌する。

生存への脅威(減少の要因)

埋立地や河川敷などの整備が進み、繁殖・生息環境が狭小化している。

保全対策

生息環境の保全。

(文責：藤島 光俊)

=参考・引用文献=

- 1) 福田佳弘, 2008. 生態図鑑 マダラウミスズメ. Bird Research News, 5(6) : 2-3.
- 2) 長谷部 真, 2015. 生態図鑑 ウミガラス. Bird Research News, 12(7) : 2-3.
- 3) 石川県野生動物保護対策調査会(編), 2020. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック 2020<動物編>. 石川県生活環境部自然保護課. 金沢. 339pp.
- 4) 環境省, 2020. 環境省レッドリスト 2020 の公表について. URL : <https://www.env.go.jp/press/107905.html> (2025 年 6 月 10 日確認)
- 5) 叶内拓哉, 2017. フィールド図鑑 日本の野鳥. 文一総合出版. 東京. 432pp.
- 6) 川上洋一, 2008. 絶滅危惧の野鳥事典. 東京堂出版. 東京. 240pp.
- 7) 河村和洋・山浦悠一・中村太士, 2019. 人工林の伐採はヨタカに生息地を提供するか? 北海道中部での 4 年間の調査. 第 130 回日本森林学会大会学術講演集原稿. セッション ID: P2-227. 一般社団法人日本森林学会.
- 8) 桐原政志, 2009. ネイチャーガイド 日本の鳥 550 水辺の鳥 増補改訂版. 文一総合出版. 東京. 368pp.
- 9) 国土交通省黒部河川事務所, 2020. 令和 2 年度黒部川水辺現地調査(鳥類)他業務報告書 第 II 編河川水辺の国勢調査(鳥類調査). 国土交通省黒部河川事務所. 黒部.
- 10) 国土交通省富山河川国道事務所, 2013a. 平成 24 年度常願寺川・神通川水辺現地調査(鳥類・底生動物調査)業務報告書. 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 11) 国土交通省富山河川国道事務所, 2013b. 平成 24 年度 庄川・小矢部川水辺現地調査(鳥類・魚類・両爬哺乳類)業務報告書 小矢部川水系(小矢部川・渋江川)鳥類調査報告書. 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 12) 国土交通省富山河川国道事務所, 2013c. 平成 24 年度庄川水系(庄川)鳥類調査報告書. 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 13) 国土交通省富山河川国道事務所, 2014a. 平成 25 年度常願寺川・神通川水辺現地調査(河川環境基図・両爬哺乳類)業務報告書 第 2 編河川環境基図作成調査(常願寺川水系). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 14) 国土交通省富山河川国道事務所, 2014b. 平成 25 年度常願寺川・神通川水辺現地調査(河川環境基図・両爬哺乳類)業務報告書 第 5 編神通川河口の鳥類等調査(神通川水系). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 15) 国土交通省富山河川国道事務所, 2015. 平成 26 年度神通川水辺現地調査(底生動物)業務報告書 第 3 編神通川河口部鳥類等調査(神通川水系). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 16) 国土交通省富山河川国道事務所, 2019. 平成 30 年度河川水辺現地調査(底生動物、両・爬・哺乳類、陸上昆虫類等、基図)業務報告書 第 5 章河川水辺環境調査(河川環境基図作成調査(常願寺川)). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 17) 国土交通省富山河川国道事務所, 2020. 令和 2 年度河川水辺現地調査(魚類、植物、陸上昆虫類等、基図)業務報告書 第 5 章河川水辺環境調査(河川環境基図作成調査(小矢部川)). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 18) 国土交通省富山河川国道事務所, 2021a. 令和 3 年度河川水辺現地調査(魚類、基図、底生動物、鳥類)業務報告書 第 2 章河川環境基図作成調査(神通川水系). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 19) 国土交通省富山河川国道事務所, 2021b. 令和 3 年度河川水辺現地調査(魚類、基図、底生動物、鳥類)業務報告書. 国土交通省富山河川国道事務所 第 5 章鳥類調査(小矢部川水系). 富山.
- 20) 国土交通省富山河川国道事務所, 2022. 令和 4 年度河川水辺現地調査(底生動物、鳥類、魚類、両・爬・哺乳類)業務報告書 第 2 章鳥類調査(神通川水系). 国土交通省富山河川国道事務所. 富山.
- 21) 公益財団法人日本鳥類保護連盟富山県支部, 2012-2023. らいちょう. (132-206).
- 22) 松木鴻謠(編), 2012. バードウォッチングに行こう! 富山の探鳥地. 桂書房. 富山. 153pp.
- 23) 松宮裕秋, 2020. 長野県南信地方におけるアオバズク *Ninox scutulata* の減少. 伊那谷自然史論集, 24 : 27-32.

- 24) 松宮裕秋・原 星一・菊池隼人・秋山 礼, 2023. 長野県中部および南部におけるオオコノハズク *Otus semitorques* の分布. 伊那谷自然史論集, 21 : 55-60.
- 25) 松岡好美, 2006. 生態図鑑 コアジサシ. Bird Research News, 3(7) : 4-5.
- 26) 箕輪義隆, 2020. 新 海鳥ハンドブック. 文一総合出版. 東京. 104pp.
- 27) 見浦沙耶子・境 健司・間宮寿頼, 2024. 富山県におけるクロハゲワシ *Aegypius monachus* の記録. 富山県自然博物館ねいの里研究報告, (4) : 1-2.
- 28) 守屋年史・松井 淳・三木敏史, 2022. 生態図鑑 セイタカシギ. Bird Research News, 2022 年 6 月(3) : 1-2.
- 29) 日本鳥学会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 一般社団法人 日本鳥学会. 539pp.
- 30) 日本野鳥の会富山, 2012-2024a. 愛鳥. (67-81).
- 31) 日本野鳥の会富山, 2012-2024b. 愛鳥ニュース. (85-143).
- 32) 小川弘司, 2019. 白山のライチョウの歴史. 白山の自然誌 39. pp.1-21. 石川県白山自然保護センター. 白山.
- 33) 大西敏一・五百澤日丸(解説), 2014. 決定版 日本の野鳥 650. 平凡社. 東京. 792pp.
- 34) 小澤俊樹, 2008a. 富山県におけるイヌワシ生息数とその危機的状況. *Aquila chrysaetos*, (22) : 1-9.
- 35) 小澤俊樹, 2008b. 国内最西端記録となる富山県でのチゴハヤブサ繁殖初確認. *Aquila chrysaetos*, (22) : 24-31.
- 36) 小澤俊樹, 2012. 富山県におけるイヌワシのペア数減少に伴う行動圏の拡大. *Aquila chrysaetos* (23・24) : 51-54.
- 37) 小澤俊樹, 2017. イヌワシの年齢による羽衣変化. *Aquila chrysaetos* (26) : 23-30.
- 38) 小澤俊樹・今森達也, 2008. イヌワシによる狩りを目的としたクマタカへの襲撃. *Aquila chrysaetos*(22) : 32-37.
- 39) 清水海渡・高畑 晃, 2023. 富山県の鳥類目録. 富山市科学博物館研究報告, (47) : 109-111.
- 40) 清水海渡・高畑 晃, 2024. 湯浅純孝鳥類・哺乳類標本コレクション. 富山市科学博物館研究報告, (48) : 95-100.
- 41) 安西英明・叶内拓哉・田仲謙介・渡部良樹, 2018. フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂新版. 日本野鳥の会. 東京. 392pp.
- 42) 富山県自然保護課, 1980. 富山県の鳥獣. 富山県. 富山. 242pp.
- 43) 富山県自然保護課, 2012. 富山県の絶滅の恐れのある野生生物 レッドデータブックとやま 2012. 富山県生活環境部自然保護課. 富山. 451pp.
- 44) 富山県野鳥保護の会(編), 1989. 富山県の鳥類. 富山県. 富山. 104pp.
- 45) 富山雷鳥研究会, 2021. 立山地域におけるライチョウ生息数調査の結果(R3). ライチョウ生息数調査.
URL: <https://www.pref.toyama.jp/1709/kurashi/kankyoushizen/shizen/raichou/kj00017342.html>(2025 年 6 月 10 日確認)
- 46) 植田睦之(編), 2023. モニタリングサイト 1000 陸生鳥類調査情報 Vol.15 No.1.
URL :
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/terrestrial_bird_NL_Vol.15_No.1.pdf(2025 年 6 月 10 日確認)
- 47) 氏原巨雄・氏原道昭, 1992. BIRDER スペシャル カモメ識別ガイド. 文一総合出版. 東京. 79pp.
- 48) 浦 達也, 2007. 生態図鑑 オオジシギ. Bird Research News, 4(10) : 4-5.